

連続公開シンポジウム

「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」 第5回「学習指導と学校図書館」および「まとめ」記録

(2016年11月20日(日) 実施；大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて)

中村百合子「立教大学の「学習指導と学校図書館」」の教育実践

今日最終回で「学習指導と学校図書館」です。3人が発表しディスカッションをやって、山本[敬子]さんにどうお考えになったか話していただきたいと思います。その後、少しディスカッションができれば。

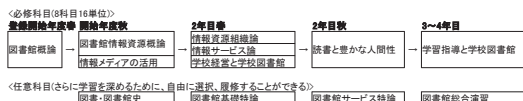
立教大学の 「学習指導と学校図書館」

立教大学
中村百合子

本日のお話の流れ

- ・立教大学のカリキュラムと履修モデル
- ・「学習指導と学校図書館」の受講者
- ・授業の基本方針
- ・評価の方法
- ・授業の目標と計画-2016年度の例(現在進行中)
- ・教科書
- ・課題：過去10年の実践から

立教大学の カリキュラムと履修モデル



-図書館司書コースの3科目(「図書館情報資源概論」「情報資源組織論」)が、「学校図書館メディアの構成」にあたるものとして、文部科学省に届け出て、認められている。
-「図書館概論」と「情報サービス論」は本大学が独自に設定している必修科目で、図書館司書コース(司書資格)の必修科目でもある。「図書館概論」の単位を初年度春学期修得できないと、他の科目を登録することができない。
-「図書館基礎特論」「図書館サービス特論」「図書館総合演習」は、図書館司書コースの選択科目で、ゼミ形式で行なっている。

まずは前回もお話したことですが、カリキュラムと履修モデルです。立教大学の学術リポジトリに初回の記録が載っているので¹⁾、関心ある方は見ていただければと思います。今日は、私の「学習指導と学校図書館」の受講者の特徴を少しお話したうえで、私の授業方針についてお話しし、評価についてどのようにやっているか、授業と合わせて話したいと思います。そして、授業の目標と計画。その後、私にとっては重要な意味のある教科書について話してい

たいと思います。教科書という存在については非常に否定的なのですが、この授業については教科書にかなり沿った形になっています。最後に10年間、教えてみてどんなことを考えているかを少しお話しします。

履修モデルはすでにお話ししているので復習的な感じで。立教は「図書館概論」という科目は司書教諭コースの学生も必修です。「学校図書館メディアの構成」という授業の提供はなし。「図書館情報資源概論」と「情報資源組織論」という2科目が必修で、「学校図書館メディアの構成」の読み換え科目になっています。加えて本学は「情報サービス論」も必修になっています。「情報資源組織論」と「情報サービス論」の演習[科目]が司書教諭の科目にはなっていないという問題がありますが、5科目10単位よりは要求しているものが多くあります。任意科目もあり、「図書館基礎特論」、「図書館サービス特論」、「図書館総合演習」は、上田[修

一] 先生、小田[光宏]先生、私でそれぞれ教えており、ゼミの形式になっており、司書課程科目を取った人たちの最後のまとめになっています。私は論文を書かせるカリキュラムになっています。

「学習指導と学校図書館」の履修生

- ・ 年平均10名
 - － 2011年度16名; 2012年度17名; 2013年度9名; 2014年度4名; 2015年度12名; 2016年度3名
- ・ 教職課程もしくは、教育学科の初等教育専攻と並行して、学校図書館 司書教諭コースを登録。登録料は15,000円
- ・ 日本文学専修の学生で、中高国語科の免許取得希望者と、他学部の社会科系科目の免許取得希望者もいる。大学院生もいる
- ・ 教育学科初等教育専攻の司書教諭資格付与課程への登録者が2000年度後半から継続して減少
 - － 小学校教員は実際に就職している印象があるので残念
 - － 司書教諭として採用された者は、2011年以降には1名

「学習指導と学校図書館」は年ごとに人数にばらつきがありますが、概して司書教諭の履修生は減少しております。過去に考えてきた授業にならないので悩ましくなっています。司書教諭コースは教員免許状の課程を取りはじめていることを前提にしているので、その学生しかいません。

授業の基本方針

- ・ 単位の実質化を目指し、単位計算の基準を厳格に考えていることを初回授業時に確認
 - － 学校図書館司書教諭講習規程第4条
 - ・ 前条に規定する[司書教諭講習]単位の計算方法は、大学設置基準(昭和31年文部省令第28号)第21条第2項に定める基準によるものとする
 - 履修の心構えは、「図書館概論」と「学校経営と学校図書館」で重々伝えてある(「学習指導と学校図書館」の初回レジュメにも書いてはいる)
- ・ 学生が主体的に学ぶよう教育方法を工夫
 - － 講師の話は毎回2/3(60分)程度にとどめるよう努力している。極めてシンプルなレジュメと教科書、板書で行なう
 - － グループワークが主体

授業の基本方針は以前お話したのと変わらないので簡単にします。私は大学の中の1科目として他の大学の授業と同じように学生に司書課程の授業を受けてほしいと思っています。大学で単位を出しているのが当然なのですが、最終的には司書教諭講習を受けたということで資格の証書が出るという制度になっていることが気になっていて、でも、立教でとるからにはこれは大学の授業なのだ、ということを伝えているつもりで、単位の実質化ということを行っています

す。大学の中で先生の方針によっていろいろな授業がありますが、私[の授業]はかなり厳しい、授業外での学習がかなり求められると伝えています。ただ授業に来てレジュメを集めて帰るといふ人には単位をあげていません。一つ違うのは、「学校経営と学校図書館」の授業は90分のうち3分の1しか私はしゃべりません。「学習指導と学校図書館」は演習系科目ですが、しゃべらなきゃいけないことが多いと思っています。

授業の目標と計画-2016年の例

- ・ (目標)学習と教授における各種メディアと図書館の効果的な活用、学校におけるそれらの整備と関連の図書館サービスの提供について理解を深める。そして、そうした教育活動を行うための基礎力を養う。
- ・ (授業計画)
 - 1 授業の概要説明; 受講生自己紹介
 - 2 カリキュラム、現行学習指導要領と学校図書館
 - 3 図書及び図書館利用指導から情報リテラシーの育成へ(その理論の歴史的発展)
 - 4 情報活用のプロセス・モデルの指導法1)
 - 5 情報活用のプロセス・モデルの指導法2)
 - 6 授業設計法概説: 学習指導案の書き方; 学習の新しい評価法
 - 7 学校図書館見学会
 - 8 担任教諭、教科教諭と司書教諭のチーム・ティーチング
 - 9 学習指導案のアイデアと学習指導案作成に用いる資料のリスト提出・発表会
 - 10 模擬授業作成作業
 - 11 模擬授業1)
 - 12 模擬授業2)
 - 13 模擬授業3)
 - 14 学習指導案改定のワーク; まとめ

授業の目標と計画ですが、目標は「学習と教授における各種メディアと図書館の効果的な活用、学校におけるそれらの整備と関連の図書館サービスの提供について理解を深める。そして、そうした教育活動を行うための基礎力を養う。」というふうになりとシンプルに設定しているつもりですが、その目標に向かってどういうふうにつけてもらうかということで作ったのがこの14回分の授業案です。説明していくと、初回は授業の概要説明、受講生同士が知り合う

ことが重要。2 回目はカリキュラムと現行の学習指導要領と学校図書館ということで、第 2 回目までに自分の教科の学習指導要領の解説を買ってきてもらい、持ってきてもらいます。教科教育法の授業を受けている学生でも指導要領の解説を持っていないという学生はいます。一緒に構造を見て、どんなことが学校図書館について書いてあるのか[を理解する]というワークが第 2 回目です。背景としていろいろ学習指導要領に関わるいろいろなことを講義しています。第 3 回は図書及び図書館の利用指導から情報リテラシーの育成ということで、アメリカでは情報リテラシーの育成ということは図書館関係の人たちが言い出したのです。いろいろなリテラシーの教育について言われているけれども、図書館に関するリテラシーとして information literacy という言い方がアメリカでされるようになってという歴史的な話をしています。それと合わせて、情報活用能力とか情報教育と日本で言われているものが information literacy を翻訳したもので文科省の周辺で出てきたという話をします。私の頭が完全にアメリカ流になっているということを学生はクリティカルに見ているという前提で、日本の調べ学習ではなく、私が今からやる information literacy に関する教育をとにかくやってみてほしいと言っています。この授業で力をつけてもらいたいのはそのための力だと言っています。information literacy の中にはあらゆるメディアが含まれるところでは想定しますとも言い切って、第 3 回では歴史を話して説得力を増すような形にしてください。

第 4 回、第 5 回は情報リテラシーのプロセスモデルをどう教えるかというアメリカの実践の紹介です。この授業では、10 年前に樹村房から堀川照代先生が編集された『学校経営と学校図書館』（樹村房，2003（司書教諭テキストシリーズ 01））を教科書に使っていて、すごく大事にしています。私が気に入っているのは、情報活用プロセスモデルのアメリカのいろいろなモデルの紹介で、39 ページにあります。どれか一つの情報活用プロセスモデルを覚えればよいのではなくて、この表を見てくださいと学生に言って、今から 5 分間で自分の言葉で言えるように覚えてくださいとその場で強要します。それで学生がどのような言い方をしてもわかっているようであればいいという程度です。なぜ覚えさせるかというと、それを教えるのがあなたたちで、プロセスモデルを教える人になってもらってということです。第 5 章でこれをやっているのですが、第 6 章以降には 6 段階[のプロセス]に分かれていて章ごとにこの段階をどう教えるかということが書かれているので、このテキストで考えていきます。それは森田[英嗣]先生[編集]の『メディア・リテラシー教育をつくる』（アドバンテージサーバー，2000）とか、庭井[史絵]さんが出している『地理で学ぶ 6 ステップ探究学習：学校図書館を活用したカンタン世界の国調べ』（2000）とか、玉川学園が出している『学びの技：14 歳からの探究・論文・プレゼンテーション』（後藤芳文，伊藤史織，登本洋子著，玉川大学出版部，2014）とか、遊佐[幸枝]さんの本（『学校図書館発育てます！調べる力・考える力：中学校の実践から』少年写真新聞社，2011）とか、できるかぎり集めていますので、いろいろなプロセスモデルをどうやって教えるかというのをやっています。第一段階はこのような教え方、このような教え方が提案されているよねという話をガンガンしていくというのが、4 回目・5 回目ぐらいです。できたら 3 回使って 2 段階ずつやっていきたいのですが、結構、パンパンで教えています。

その後、第 6 回は授業の設計法とか学習指導案の書き方、評価ですが、教科教育法を受けているからと言ってこのあたりができるようになっていくのかと言ったら大間違いです。私の経験では司書教諭の授業は人数が少ないので指導案もかなり見てあげられるのですが、[教科教育法が]比較的大きな教室の授業だと先生がやり方を教えるだけだったり、先輩からちらっと見たり、などという話になっています。この段階ですでにプロセスモデルを教えていて、自

分だったらどんな授業ができるかを考えさせはじめています。そこに、中山[美由紀]さんたちがやっている（東京学芸大学の「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」(<http://www.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/htdocs/>)をひいたり、いろんな指導案を見たりして考えてきてもらって指導案の書き方を指導するというのが第6回です。今年は[学校図書館]見学会を実施することができましたが、学生の日程が合わないで見学会の実施は難しいです。今年は遊佐さんの東京純心[中学・高等学校]に行って、家庭科教育と図書館のコラボレーションを見ました。その後、TT（ティーム・ティーチング）のスキルについての話をします。一人で授業をやるのとTTはスキルが違うということで、TTの掛け合いなどのスキルについて資料を読んでもらったりしながら、TTでお互いの専門性を引き出しあうということはどういうことかを考えてもらいます。

その後、第9回で指導案を作ってもらいます。指導案を作るときに学生たちが見落とすのは、資料があるのかを考えないでアイデア勝負の指導案を作ってくるわけです。この科目を教えるはじめた頃に何回か見て、この人たちは学校図書館に勤めたことがないし、コレクションも作ったことがないから、こういうことが起き得るのだとわかってきたので、模擬授業の前にリストを出させることにしました。そのリストは2種類でA4の裏表の一枚に収めなくてはならないことにしています。そのうちの前半は自分が教員側が授業案を作るときに参考にした資料のリスト、裏のもう一つのリストは子どもがその授業をするときに手にする資料のリストを作らせています。特に後半の方をやらないとアイデア勝負のものを出してきます。そうして模擬授業をみんなでやって、小学生なら45分、中・高なら50分の模擬授業をして、ディスカッションをします。最終回はその模擬授業を経て、皆さんからもらったその日の授業評価シートを見ながら、授業案を作り直してもらって出してもらいます。

評価の方法

- ・ 授業への出席と積極的参加(20%)←発言や態度を個人評価
- ・ 授業中でのグループ発表(20%)←グループ評価
 - － 学習指導案のアイデアと学習指導案作成に用いる資料のリスト提出・発表会
- ・ 模擬授業(30%)←グループ評価
 - － 模擬授業は小学校は45分、中学校・高校50分で、司書教諭役と教科教諭役のペアで実施
 - － 受講人数が多く、グループで準備した場合は、途中で入れ替わって全員が教壇に立つこととする
- ・ 学期末レポート(30%)←個人評価
 - － 模擬授業後の検討会、また検討会後に他の学生から受け取った「授業評価表」を参考にして、個人で学期末レポートを作成、提出

いつも通り、積極的参加をしてもらいたいということと、グループ発表ということとで授業案のアイデアと資料を出してもらった時の発表があり、模擬授業もグループ評価です。ただし、最後に模擬授業が終わって出し直してもらった指導案は個人評価をします。

授業案・模擬授業の要件

- ・ 司書教諭役と教科教諭役のT.T.の授業案であること
 - － 情報活用能力/情報リテラシーの育成に関する目標と、教科としての目標を定めること
 - － 評価も、教科教諭の側が設定するものと司書教諭の側が設定するものの双方が含まれていること
 - － 教科教諭と司書教諭のそれぞれの動きと、その意味が分かるような書き方がされていること
- ・ 授業者としてのスキルと、Teamとしてより効率的/効果的に動くためのスキルを模擬授業までに練習しておくこと

授業案の要件ですが、司書教諭役と教科教諭役のTTの授業案を作らせます。司書教諭役は情報活用能力と情報リテラシーの育成の目標と、教科としての目標を定めることを条件にしています。また、評価も教科教諭側が設定するものと、司書教諭側が設定するものの双方が含まれているようにしてくださいとしています。教科教諭と司書教諭のそれぞれの動きとその意味がわかるような書き方をしているのも条件にして

います。授業者として、チームで効率的効果的に動くためのスキルを模擬授業までによく練習するようと、丸投げで司書教諭の先生が一人で授業やってとか、もしくは45分のうち30分を司書教諭役が一人でやっていて、もう一人の先生役が黒板の横に立っているみたいなのはだめだよと言っています。そういうことも実際、授業であるかもしれないけれど、模擬授業では掛け合いを大切にしながら、お互いの先生の存在の意味をちゃんとわかるようにしてくださいと言っています。

教科書

- 堀川照代編『学習指導と学校図書館』樹村房、2002(司書教諭テキストシリーズ03)。
 - 自分が学習指導案を作成する教科の学習指導要領解説
- 多くの参考資料を提示(検索、参考資料収集を促す)
 - 新しい教育と教育方法に関する参考資料
 - <キーワード> 授業/教材設計(授業デザイン:インストラクショナル・デザイン); 協同/ 協調学習; 探究(型)学習; 調べ学習; 問題/課題解決学習
 - また、キーワードを教科名と組み合わせて検索してみるとよい
 - 情報リテラシーとその育成に関する参考資料
 - <キーワード> リテラシー; 情報リテラシー(インフォメーション・リテラシー; 情報活用能力); 情報探索; 情報行動; 批判的リテラシー; メディア・リテラシー; クリティカル・シンキングなど
 - 理論的なものだけでなく、実践紹介本、研究会等で入手した資料も提示
 - 後藤芳文、伊藤史織、登本洋子『学びの技:14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』玉川大学出版部、2014。
 - 庭井史絵編著、チームちりぶろ『地理で学ぶ6ステップ探究学習:学校図書館を活用したカンタン世界の国調べ』[自費出版]、2010。

ちなみに情報リテラシーの目標は実はこの教科書の後ろに、青山学院の小学校低学年から高校3年生までが6つのプロセスのどこを学んでいくかを書いたカリキュラム案があります(p.164-169)。これや、プロセスモデルをどうやって教えるのか、要するに、例えば歴史では縄文時代の勉強は小学校、中学校、高校でも学び、らせん状に回っていくというように、プロセスモデルを学ぶことも同じように回って高度化していくように考えてることを強調しているつもり

で、そのためにもこの教科書が非常に重要な役割を果たしています。また、学生に自分で授業案のアイディアを探しておいでというだけだとどうやって探したらいいかわからないぐらい新しい話なのだなというのが私の印象です。だから教科書が重要になっている。TTも情報リテラシーを育成する目標を立てるのも新しいし、とにかく自分が経験したことがないというのがあって思っているのも、先ほど言ったような森田先生の本、庭井さんの本、遊佐さんの本、中山先生がやっているデータベースなど、ここにいらっしゃる方々の本も含めて、本当にありとあらゆる関連本…玉石混交(笑)、変なものも含めてプロセスモデルを教えるために出されたと思しき本はどんどん見せます。批判するなら使わなくていいので。教授法も新しくなるし、情報リテラシーの育成も新しいということで実践的なものを含めてがんがん見せているということです。

課題:過去10年の実践から

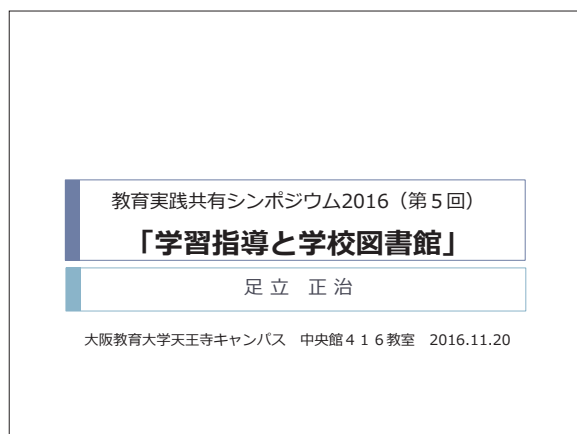
- 10名程度いれば、学生たち間でとてもよい意見交換ができる
- 学校図書館の場や資源を活用する授業の模擬授業を大学の教室で行うことは容易ではない
 - せめて学校図書館見学会を実施(でも…日程調整が難しい!)
- 「情報資源組織演習」「情報サービス演習」を受講していない学生たちが、情報リテラシーの専門家になることができるのか?
 - やる気のある学生はこのクラス「学習指導と学校図書館」を受けて、問題意識をもち、司書資格取得を目指すようになる(でも遅かったりして…)
- 本学教職課程が大きく、連携ができていない
 - あらゆる科目について、複数(たくさんの)クラスが開講
 - 講師中心の模擬授業しか見たこともやったこともない、「社会構成主義」を一度も聞いたことがないと言へる 学生の存在。どこから教えればよいのか

最後に。[受講生が]10名いてほしいというのが10年やっていて思っていることですが、今、司書教諭課程の変革期だと思うので上手くコントロールできていません。学校図書館の資源や場所を活用する授業を大学の教室でやるというのは至難の業で、先ほどのリストを出させることで補完しているつもりだし、学生が欲しいと言った資料、例えば『ポプラディア』を買い、司書課程としてできることは一所懸命、できることはしていますが、なかなか難しいし、イメージ

がすらわかない学生もいて、学校図書館見学会を実施したいけれど日程調整が難しくてできない年が結構あります。それでも今年は2名か3名で行きましたが、とにかく難しいです。それから「情報資源組織演習」(本学では「目録」と「分類」の2科目)と「情報サービス

演習」(本学では1(情報検索)と2(レファレンス・サービス)の2科目)を受講していない学生が情報リテラシーの専門家になり児童・生徒を教えるというのは至難の業で。情報検索も、ネットで検索して上から出てきた何件かを見ましたということをやっちゃう学生がいます。そういう人たちに、そういうレベルじゃなく情報探索をするということは…というところから話さないといけないときもあります。私が言っていることを聞いたことがあるが、演習をしたことがない人たちが情報リテラシーの専門家、教える側になる指導する側になるというのは至難の業です。ただし、この授業を受けて本当にまずいと思って司書資格を取りはじめる学生が毎年のように発生しています。これをやらないと司書教諭になれないということがわかってくるということで、このクラスに司書コースも取っているという学生が一人でもいると、その子がどんどんリードできるので、他の学生も司書資格をとりたくなるのですが、だいたい3年生なので遅いのです。現在、働きながら通信をやっている子がいるのもこういうところからです。教職課程が大きくて連携ができていません。同じ建物にいてももっと仲良くすべきだというのは重々承知なのですが、専任教員といくら話に通じていても非常勤が山ほどいるので、その非常勤の先生のクラスの教科教育法に口を出すというのはほとんどできません。ただしごく正直に言えば、教科教育法で、本学の学生だけでなく、他大学で学部で教科教育法を学んできた院生もいて、それも習っていないのかということが日常茶飯事で、生意気な言い方になりますが、驚き呆れることもあります。

足立正治先生「学習指導と学校図書館」の教育実践

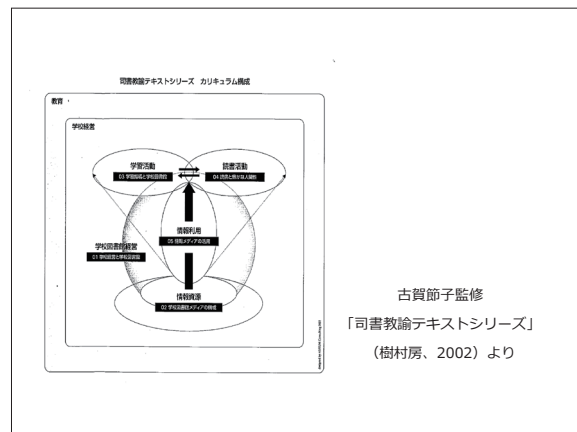


私が司書教諭の養成に関わったのは2002年からです。講習は2013年まで、学部の授業は昨年(2015年)の春学期までやりました。現在はリタイアしておりますので、今から皆さんのアドバイスを受けて自分の授業を改善することはできないのですが、それでも自分の経験を振り返ることは意義があると思いますし、これから司書教諭養成のあり方を考えるうえで何かのお役に立てばと思い、お話をさせていただきます。

発表者のバックグラウンド
<ul style="list-style-type: none"> 学校図書館に関わる略歴 <ul style="list-style-type: none"> 1994年～2002年 甲南高等学校・中学校で学校図書館経営 2002年～2015年 大阪樟蔭女子大学、大阪大学、南山大学で非常勤講師 「学校経営と学校図書館」「学習指導と学校図書館」 2002年～2013年 滋賀大学「学校図書館司書教諭講習」講師 学習指導に関わる経歴 <ul style="list-style-type: none"> 1963年～2009年 兵庫県の県立高校・私立高中で英語科教員 1980年～ 一般意味論の研究と実践 1988年～ クリティカル・シンキング教育の研究と実践 1992年～ 数年にわたって日本語教師養成に関わる 2005年～2009年 中学で「情報活用」を担当

まず、第1回と同様に、今日のテーマに関連して私のバックグラウンドを簡単にお話しします。昭和22年に小学校に入学しました。学習指導要領が制定された年です。その翌年に日本国憲法は公布されました。戦後の学校教育をフルに受けた最初の世代ということになります。教職に関わるようになってから自分の受けた教育を振り返ってみると、例えば、ジョン・デューイの教育論やエドガー・デールの視聴覚教育論は、わりあいすんなりと入ってくる部分がありました。英語の教師でしたので言語教育

との関連で、一般意味論にもよく触れる機会がありました。それがその後のクリティカル・シンキング教育とかホリスティック教育とかに関心をもつ素地になっているのではないかなと思っています。学校図書館には50歳を過ぎてから校務分掌として8年間、当時の図書課長（視聴覚課長と兼務）という立場に関わりました。週4時間の授業の減免があり、兼務の司書教諭と同じ立場でした。幸いなことに実務は司書の皆さんがやってくださっていたので、私は専ら図書館を活用した教育のあり方を考えて、それをいかに全校的な実践にうつすかということに専念できました。そういった経緯から養成の授業でも学校経営とか学習指導といった観点から学校図書館の活用を考える2科目を担当することになりました。



中村さんと同じように、「学校経営 [と学校図書館]」のときと同じ樹村房の司書教諭テキストシリーズを参考にしました。

五科目相互の関係

- ・ 「司書教諭テキストシリーズ」 (樹村房, 2002) のコンセプト
 - 配布資料参照
 - 「（『読書と豊かな人間性』で学ぶ）子どもの読書活動とその指導のあり方とは、子どもの学習活動とその指導に関わる「学習指導と学校図書館」と有機的に関連づけて学ぶ必要があるし、この両科目は、学校図書館資源の収集・整理・保管に関わる「学校図書館メディアの構成」、ならびにその利用・提供にかかわる「情報メディアの活用」の両科目において学習される知識と技能との基礎の上に立つものでなければならない」

朝比奈大作・編集『読書と豊かな人間性』（樹村房、2002）序文より

私たちは、とかく目先のことに捉われて全体が見えなくなっていることが多いので、養成の授業でも、できるだけ全体の構造の中で今やっていることを意味づけることを心がけました。学校図書館は、よく学習情報センターとか読書センターとか言われるわけですが、両方の機能がお互いに関係しあって成り立っていることを忘れては困る。学習指導は読書の活動が支えて、読書の活動も学習活動に支えられているという関係で、このあたりのことをこの前のシンポジウムでお話いただいた朝比奈 [大作] 先生も指摘しておられます。

シンポジウムでお話いただいた朝比奈 [大作] 先生も指摘しておられます。

情報活用能力の育成

「情報活用能力の育成は、学校図書館、情報教育、種々の教科教育という縦割りで捉えられるものではなく、横断的にとらえられ取り組まれるべきものである。児童生徒のなかでは、決して、縦割りに学習活動が行われているわけではないのである。したがって、情報活用能力の育成は、全教職員によって全校的に計画を立て推進されるべきものであり、とくに司書教諭と情報関連担当教諭の協働が必要となる」

堀川照代・編集『学習指導と学校図書館』（樹村房、2002）序文より

このテキストが情報活用能力の育成に絞り込んでいるところにも注目しました。どうやって学校図書館を学習指導に活かしていくかということを考えるときに、その基盤となる情報活用能力の育成を考えていくことが大切だと思います。ここでは情報活用能力の育成は横断的に捉えられ、取り組まれるべきと書いてあります。もう一つは、全教職員によって全校的に計画をたてて推進されるべきものであり、特に司書教諭と情報関連担当教諭との協働が必要になるという指摘をしているわけです。

テキストの構成（目次より）

第1章 学習指導がめざすもの	第9章 情報・資料のまとめと 伝達・保存
第2章 情報化社会における リテラシーと学校図書館	第10章 問題解決学習の活動の評価
第3章 新しい学習目標と 学校図書館	第11章 情報活用能力の育成と 学校図書館
第4章 学校図書館利用指導から リテラシー教育へ	第12章 学校図書館メディア活用 能力の指導計画
第5章 情報活用能力を育む指導	第13章 学校図書館メディア活用 能力指導計画の実施
第6章 テーマの設定と 情報探索の計画	第14章 学習指導における司書教諭の 積極的な役割
第7章 情報・資料の探索と収集	第15章 情報教育の一翼を担う司書教諭
第8章 情報・資料の活用	

講習内容（テキストの再構成）

1. 学習指導と学校図書館 <ul style="list-style-type: none"> ・情報化社会における学校 ・情報とメディアのリテラシー ・学習指導要領と学校図書館 ・教育課程の編成と展開 	3. 情報サービス <ul style="list-style-type: none"> ・パスファインダーの作成 ・レファレンス (レファレルサービス、カレント アウェアネスを含む)
2. 探究学習の展開 <ul style="list-style-type: none"> ・情報活用プロセス・モデル ・探究活動の展開 ・評価 ・指導計画 	4. 司書教諭の役割 <ul style="list-style-type: none"> ・全校的な探究学習の推進 ・情報サービスの提供 ・教育課程の編成と展開 ・教職員及び地域との連携

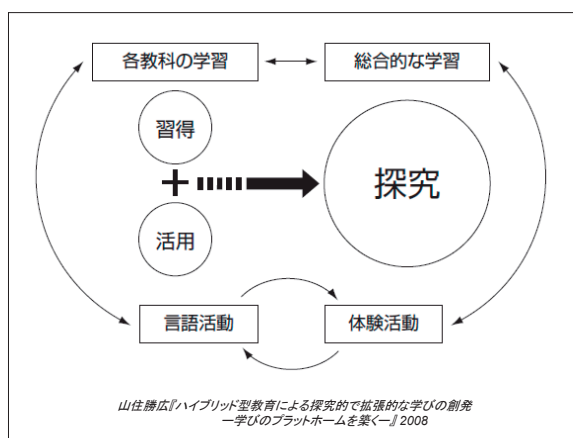
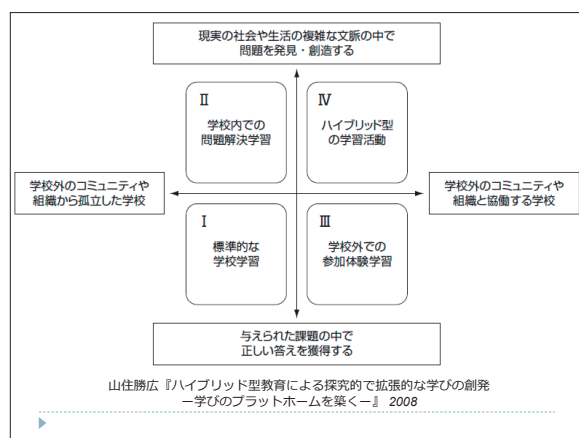
私なりにテキストの内容を再構成しました。1が序論、メインは2と3で実習、ワークショップが中心になります。講習では、1日目から探究学習の展開を視野に入れてワークショップの準備をはじめていきます。4は、最終日の午後に関時間を取って講習を振り返ってもらいます。情報サービスについては、時間の関係もあってパスファインダーの作成とレファレンスの二つの項目しか扱いません。そこからいろんな情報サービスのバリエーションが考えられるだろうと思っています。「教育課程の編成と展開」が二か所ありますが、学校図書館法では展開しか書いていないのですが、編成に関わることも重要だと思っています。最近、個々の教員の裁量権がだんだん狭められてきていて、お仕着せの教育課程を逸脱することなく、そのまま忠実に展開する授業が行われることが多い。司書教諭一人一人の学校での立場や影響力はさまざまですが、それでも教員である限りは全校的な教育課程、あるいは各教科の教育課程に対して何か意見を言って働きかけていくこともできるだろうと思っています。兼務の司書教諭であっても、教員会議の時に発言したり、各教科の先生方をつかまえてその教科の教育課程、カリキュラムについて話をし、こういうところで図書館の利用ができるのではないかと、なんらかの形で関わっていくことができるはずです。それを強調するために講習の導入のところで振り返りのところで「教育課程の編成と展開」を取りあげて、皆さんの考えを出してもらうことをやっています。

講習で目指したこと

以下の活動について理解を深め、司書教諭が果たすべき役割を考える

- ・ 情報とメディアのリテラシーを培う学習指導
 - 習得・活用中心の授業から探究学習への橋渡し
 - 教科書以外の多様な情報源の活用（学校図書館メディアの活用）
- ・ 学校内における探究学習の推進
 - 相談、助言、協働（指導計画作成、チーム・ティーチング…）
 - 教職員相互の連携と協力による探究を促進する学校文化の形成
- ・ 学校の外（地域）に開かれた学習活動
 - 学校の外にリソースを求め、地域の施設や専門家と協働する
 - 社会から学び、社会に貢献する学習活動の推進

講習で目指したことは、学校図書館を活用する活動のあり方について理解を深め、司書教諭が果たす役割を考えてもらうことです。これだけではわかりにくいと思うので次の図をつけました。これは懇意にさせていただいていた関西大学の山住勝広先生の本の中に紹介されている二つの図ですが、これらの図を通して自分の学校の教育活動を把握し、学習指導のあり方を振り返って、評価と改善に役立てて、学校図書館の関わり方を考える手がかりにできるのではないかと思います。



授業の方法

- ・ 情報提供
 - 基本的概念の解説、資料配布、ビデオ（DVD）、参考図書や調査課題の提示（事前調査課題、大学図書館の活用…）など
- ・ グループワーク
 - 協働による実習、討議、発表
- ・ 受講者と相互のフィードバック（振り返りシートの活用）
- ・ 心がけたこと
 - 受講者の意識や理解に応じた導入と励まし
 - 具体的な実践事例の紹介
 - 適切な課題の提示とサポート

授業の方法ですが、基本的に私自身はインフォーマントとガイド役という二つに徹することになっています。インフォーマントは情報提供者のことで、私が学校図書館の基本的な情報を提供して、先生方にいろいろ考えてもらう手がかりになればいいと思っています。ワークショップはグループでやってもらいました。1回目に話したものと重複するのですが、授業での自分の学びの経験を書いてもらう振り返りも重要視しています。受講者とのフィードバック回路

をきちんと確保しておくために、私にとってはこれが非常に重要です。振り返りシートを書いてもらうことによって、受講者が私の話を誤解している場合は訂正し、上手く表現できていない場合にはそれを問い返して、さらにきっちりと語ってもらう。講習の場合は前日に書いてもらったものを翌日の朝一番に皆さんと問答しながら、前日の学びを共有してから、次の作業に移ります。結構、丁寧にやっていました。

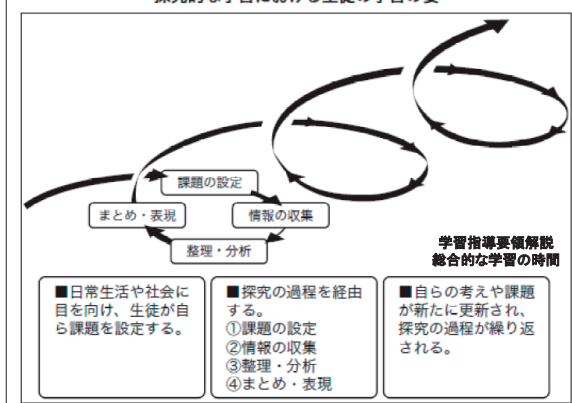
探究学習の展開と指導の要点

プロセス・モデルの活用

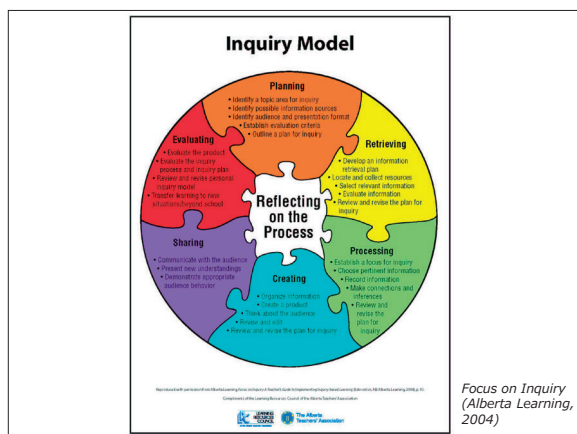
- 複雑な学習過程を整理する
- 見通しを立て、計画的に学習を進める
- 学習の進捗状況を把握する
 - (生徒にとって) 自らの学びを調整できる
 - (教師にとって) 必要な時に適切な介入を行える
- 困難や挫折を乗り越える手掛かりを得る
 - どこでつまづいたかを知ることができる

探究のところだけ説明したいと思います。先ほどの中村さんの話とは逆になるかもしれませんが。私の場合、プロセスモデルは使うのですがプロセスモデルに従って授業を進めることは勧めていません。探究の学習は子どもたちにどんどん試行錯誤させましようと言ってます。その中で、必ず生徒が迷ったり袋小路に陥ったりして上手く進まないことがあります。探究というのは非常に複雑な作業をやるわけですから、それをきちんと整理をするためにプロセスモデルを使いましょうということです。学習者が強い感情をもった場合、学習が進まなくなることがあります。困難や挫折といった負の感情だけでなく、本筋から逸れた事柄や情報に非常に興味をもってそこに集中した場合も先に進まなくなります。そういった場合でも、強い感情に捉われて学習が停滞しないようにプロセスモデルを念頭において自分の学習過程をモニターしていることが必要になります。

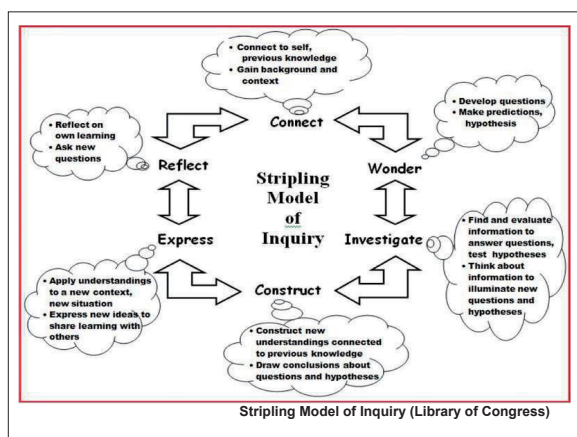
探究的な学習における生徒の学習の姿



学習指導要領の解説には小学校から中学校まで全学年同じプロセスモデルが出ています。これは結構よくできていると私は思っています。そして、「他者と協同して取り組む学習活動にすること」として、「多様な情報を活用して協同的に学ぶ」「異なる視点から考え協同的に学ぶ」「力を合わせ交流して協同的に学ぶ」という3点を挙げています。これを外さないようにしてこのプロセスを循環的に辿っていく。Big 6のような直線的なモデルではなくて、循環的なプロセスモデルを使うことを私は勧めています。



これはカナダのアルバータ州の Inquiry モデルです。今、カナダの学校図書館は Library Learning Commons (LLC) に移行していますが、このモデルは、もとは Alberta Learning の HP に出ていたのです。現在は、Alberta Learning がなくなって Alberta Education になっていて、そこに資料として保存されていて膨大なガイドブックですが、非常に参考になります²⁾。



もう一つ、最近のものとしては日本にも来られたことのある [Barbara] Striplingさんのモデルも循環型になっています³⁾。段階を追って順番にやっていったらいいのだというように受けとめられ、マニュアル化する恐れのあるようなモデルはできるだけ避けて、試行錯誤的に行ったり来たりする循環型モデルを使うように勧めています。

探究学習を促進する評価の在り方

- ポートフォリオ
 - 探究の過程における学びを評価（形成的評価）
- パフォーマンス
 - 決められた時間とスペースにおける評価（作文、発表、スキルなど）
 - 日常的な活動の観察（調査研究能力、自己学習能力、対人表現能力）
- ルーブリック
 - 探究に必要なスキルなどの達成度を自己評価

講習や学部授業では、試験はやりません。学習過程の観察とポートフォリオの二つを使います。学習過程でやったことを全部ファイルにして提出させています。人数は多くないので、授業への参加態度や、課題をちゃんとやってきたかは見ればわかります。自発的にさらに発展的に学びをしているがどうかは、振り返りで見ます。学部の授業でも毎回振り返りをやっていて、どんなことに気づいて何を学んだかを書いてもらい、それに対するフィードバックを次の授業でします。

14、15回の授業を通じてその記述の仕方がどう変化していったかを学生自身にもわかるように見えています。

アメリカの学校図書館基準に学ぶ

- ・ 児童生徒の学習のためのインフォメーション・リテラシー基準 (AASL/AECT, 1998)
 - 情報リテラシー (情報へのアクセス、評価、活用を効果的に行う)
 - 自主的学習 (情報リテラシーを身につけて自ら主体的に学ぶ)
 - 社会的責任 (民主的社會における倫理的行動と集団活動への参加)
- ・ 21世紀の学習者の基準 (AASL, 2009)
 - 探究し、クリティカルに思考し、知識を得る
 - 結論を導き、情報にもとづく決断をし、新たな状況に知識を適用して、新しい知識を生み出す
 - 知識を共有し、民主主義社会の一員として倫理的かつ生産的に参加する
 - 個人的、美的成長を追求する

常に疑問に思っていること、私自身が常に自分に問いかけていることがあります。学校図書館を活用する教育活動によって、いったい我々は何を目指そうとしているのか、どういう人間を育てようとしているのかということにどう答えていったらいいのかを考えたときに、理念倒れという批判もあるかもしれませんが、アメリカの学校図書館基準には明確に書かれています。1998年と2009年の基準を比べてみると非常に明確です。これをきっかけにして、私はジョン・

デューイのことを勉強しなおしたいという気持ちになり、読書会をやりはじめました。

情報リテラシーを身につけて自主的に学び、民主主義社会の一員として責任をもった行動ができる人間を育てることが1998年の基準では明記されているし、2009年の基準では、探究と創造といった活動を通して、民主主義社会に参加し人間的な成長を目指す生き方を追求するということが指摘されています。それを具体的な指導に活かすために、自分がやってきたこと、あるいは足りなかったところをチェックするためのヒントが基準に書かれています。

観察と介入のポイント

- ・ 学びの共同体
 - 相互作用によって、個性を触発し合う共同体
- ・ 経験の共有 (コミュニケーションを通じた学び)
 - 差異の表現 (個々の経験の違いを表現し、共有する)
 - 想像力の解放 (現実の中に可能性を見る力)
 - 反省的思考 (クリティカル・シンキング)
 - 自発性の喚起 (新たな行動に駆り立てる欲求や衝動)
- ・ 美的経験へ
 - 能動的経験と受動的経験の調和 (相互作用による気づきと学び)
 - 制作、議論、探究過程において美的経験を求める

子どもたちが協同的に学ぶ過程に教師や司書教諭がどう関わるかということですが、ただ関わればよいだけでなく、まず、教師自身も含めた学びの共同体が形成できているかどうか、相互作用によってお互いが触発しあって学び合う共同体になっているかを見ていきたいということです。

次は、コミュニケーションのプロセスを観察して、上手くいっていない場合には何らかの形で介入していく必要があります。いくつか挙げてありますが、日本人は他者の

意見に同調することによって人間関係を築いていくと言われていますが、考えの違いをきちんと表明できるか、それを許容する人間関係になっているかどうか。想像力、イマジネーションというのは、ここでは「現実の中に可能性を見る力」という意味です。現実を見ない「妄想」ではなくて、現実の中に見えていないものを想像してさまざまな可能性を見ていく力をどういうふうに育てていくかということです。反省的思考 (クリティカル・シンキング) については、私が学んだリチャード・ポール (Richard Paul) 先生のクリティカル・シンキングの資料を添付してあります。これを元にして生徒の学びを観察し、助言を与えたり、問いかけたりしていくということです。最後は、学習が自発的な活動になっているかどうかということです。これについては、いわゆるヴィゴツキーの理論であるとかブルーナーの足場かけ理論とかいろいろありますし、最近注目されているアフォーダンスという考え方も取りあげます。学習者のやる気にどうやって火をつけるか具体的な方法を提示して、それらをどんどん活かしていきましょうという話をしています。

最後の「美的経験」については、ジョン・デューイを読み、2009年の基準を見て、課題

として浮かび上がってきたもので、自発性にもつながってくるわけですが、子どもたちがまず喜んで気づきを得られるような経験をどれだけさせているだろうか、ただ単に課題の提出期限で追いたてるだけの授業になっていないか、子どもたちが話し合いの中で自分の発言がきっちり受け入れられて、よかったと思える経験になっているかどうかというところも見ていけたらいいと思っています。

家城清美「学習指導と学校図書館」の教育実践



本日の内容

- はじめに 講師を引き受ける前に考えたこと
- 1-1・2 略歴・ 講義を支えてきたもの
- 2-1・2 「学習指導と学校図書館」のねらい
- 2-3 講義概要
- 2-4 授業内容
- 2-5 授業事例 1・2・3
- おわりに 授業の課題 1・2・3

はじめに一講師を引き受ける前に

1999年晩秋 恩師からの☎

私にやれるだろうか？

私がやっても大丈夫？

現場の経験者を文部省は望んでいる

同僚⇒図書主任⇒教頭⇒校長 了承

2000年

京都教育大学 春季「学習指導と学校図書館」

今日の話の順番ですが、なぜ私が大学で教えるようになったか、授業の科目の狙い、講義概要・授業概要、講義をやって考えていることでお話を進めたいと思います。

1998年に学校図書館法が改正されて、1999年、京都教育大学の講師の依頼が来ました。大学で免許・資格として司書、司書教諭、教職を取得していました。大学の恩師は司書教諭で入れると思っていたのですが、雇用形態は事務職の司書でした。なぜ司書教諭になれなかったかという教師だと授業のコマ数で勤めます。図書館は開館時間があるのでその時間は図書館に居てほしいとすると拘束時間での勤務になり、事務職である司書での採用しかないという発想だったようです。第二次オイルショック時だったので、本当に就職がなく就職できたという喜びの方が大きくて、入社当初は先のことは考えていませんでした。しかし司書であるということでもいろいろありました。教職でない私が制度的に大学講師ができるのだろうか、私に資質的に講師が務まるだろうかとう二つの心配がありました。恩師からは現場の経験を積んだ人が必要だからぜひやってほしいという話でした。上司には了解を得られましたが、なぜ事務職員が大学に教えに行くのかと事務職員間で理解が得られませんでした。紆余曲折があったものの、管理職の了承がありましたので、その年から「学習指導と学校図書館」を教え、これが私の大学で教えるスタートとなりました。

1-1 略歴—学校司書⇒司書教諭 ⇒非常勤講師（大学）

- 2000・02(H12・14)年 京都教育大学非常勤講師
「学習指導と学校図書館」
- 2003～2009(H15～21)年 放送大学分担講師
「学校経営と学校図書館」
- 2004(H16)年 京都ノートルダム女子大学非常勤講師
「学習指導と学校図書館」
- 2009(H21)年～ 同志社大学嘱託講師
「学習指導と学校図書館」
- 2010(H22)年～ 同志社女子大学非常勤講師
「学習指導と学校図書館」
- 2012(H24)年～ 大谷大学非常勤講師
「学習指導と学校図書館」
「情報メディアの活用」

その後、隔年で京都教育大学で教えた後、放送大学の分担講師を務めました。京都ノートルダム女子大学でも教え、その後、同志社大学、同志社女子大学、大谷大学でも教えています。「学習指導と学校図書館」しか教えていません。大谷大学では「情報メディアの活用」も担当していますが、これは教員2人で30名前後の学生を主に演習をさせながら教えています。その中でディベートもしており、その演題を毎年、私が考えています。

1-2 講義を支えたもの

- 恩師の所蔵資料に触れて
アメリカの学校図書館基準
- 大学での研究会への参加
『Information Power II パートナーシップの構築』の和訳、Know It Allの聞き取りと和訳
- 母校での講演会への参加 ALAの会長などの講演
- 傘下の中高との研修会・情報交換
- 「総合的な学習の時間」等への参加と協働
担当教員の授業方法・課題を知る。生徒を知る
→支援の経験を積む
良い課題とは、AssessmentとRubricの理解。



講義を支えてきたものは、なぜ学校図書館は利用されないのだろうか、利用はされているとしてもどうして認識が行き渡らないのかという思いでした。勤め先が同志社大学に近く、時間があると恩師のもとへ行っていました。恩師はアメリカの学校図書館の研究を主にしていた人なので、いろいろな資料があり読ませてもらいました。いろいろな講演への参加もでき、こんなふうに図書館が使われているのかと司書の時代から見ていました。同志社自体、新島襄がア

メリカへの留学経験があり、同志社大学設立の際に一番はじめに作ったものが教会・教室・書籍館という図書館でした。ですから、中学校・高等学校でも本は大事ということで予算も潤沢にありました。しかし、司書教諭と司書の違いはあまり理解されていなかったと思います。入社後しばらくして、事務職でも司書と書かれていた呼称がなくなり一事務職が2人図書館にいるという形になりました。その中でだんだん人事異動の対象となる流れが出てきました。新館の図書館を作りやコンピュータ化などいろいろなことを行き詰まりもありながらやっていました。

1998年に学校図書館法が改正され、私は2001年に専任・専門・専従の司書教諭に発令されました。同志社四中高の中で一番早く司書教諭になり、他の中高の図書主任も見に来て、司書教諭の働きがわかってきた段階で各学校にも司書教諭が置かれるようになりました。司書教諭になった翌年から「総合的な学習の時間」をしなくてはならなくなりました。同志社の四中高の生徒のほとんどは同志社大学に入りますので、高校三年になると受験というよりはレポートを書くなど調べ学習をどんどんやっていました。口頭発表や作品制作をしていたので、学校自体、「総合的な学習の時間」を特別視することなく、高校でやっているのだからという雰囲気でした。教務主任から依頼を受け、いろいろな教科、各学年の先生に向けて調べ学習とは何かなどのレクチャをすることになりました。私は司書の時は授業のコンサルタント、カウンセラーの役割だったのですが、司書教諭になってからは一足飛びに学習そのものをコーディネートするような役割を担うようになりました。司書の時にやっていた支援とは違い、いろいろな授業実践などを見ていくようになりました。各先生のいろいろな課題を見る中で、生徒にとって楽しい課題もあれば、5分でできてあとは騒いしてしまうような課

題もあり、何が違うのだろうかと考えることを体験していきました。その中で『インフォメーション・パワー：学習のためのパートナーシップの構築』（アメリカ・スクール・ライブラリアン協会，教育コミュニケーション工学協会共編，同志社大学学校図書館学研究会訳，日本図書館協会，2000）という本を訳しました。その中に二つの評価方法で Assessment と Evaluation が出てきます。Assessment の意味として、点数とかでの評価はしないけども状況は判断するということとしかわからなかったのですが、授業がはじまってみると、ある学年でアメリカ人の先生と組むことができました。生徒が私語し出すと上手く先生が生徒の中に入って行き生徒から授業での活動の進捗状況を尋ねる場面が何度かあり、これが Assessment かとわかってきました。ループリックへの理解もこのあたりからできるようになりました。司書教諭になった当初から、授業は情報活用の理論を前面に押し出すのではなく、先生の課題を検討し、何が問題か司書教諭がまず考え、実践し、その過程を振り返り重要なことを授業に取り入れるという方を取り入れていました。

2-1 「学習指導と学校図書館」のねらい

平成10年3月18日付文初小第80号 文部省初等中等教育局長通知「学校図書館司書教諭講習課程の一部を改正する省令について」より

司書教諭の講習科目のねらいと内容	情報メディアの活用
<p>ねらい：学習指導における学校図書館メディア活用についての理解を図る</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)教育課程と学校図書館 2)発達段階に応じた学校図書館メディアの選択 3)児童生徒の学校図書館メディア活用能力の育成 4)学習過程における学校図書館メディア活用の実践 5)学習指導における学校図書館の活用 6)情報サービス（レファレンスサービス等） 7)教師への支援と働きかけ 	<p>ねらい：学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る</p> <p>↓</p> <p>「学習指導と学校図書館」ならではの重要なことは？</p>

「学習指導と学校図書館」を教えるようになって、文科省からのアンケートに答えることがあまりました。「学習指導と学校図書館」のねらいは学習指導における学校図書館メディア活用についての理解を図ると記されていました。教える内容は①教育課程と学校図書館、②発達段階に応じた学校図書館メディアの選択、③児童生徒の学校図書館メディア活用能力の育成、④学習過程における学校図書館メディア活用の実践、⑤学習指導における学校図書館の活用、⑥情報

サービス（レファレンス等）、⑦教師への支援と働きかけで、こういうことを教えてくださいとなっていました。「情報メディアの活用」を見てみると、ねらいは学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図ると書いてあります。

2-2 「学習指導と学校図書館」のねらい

ねらい：

- * 学習指導における学校図書館の活用の理解
メディアだけでなく、資料・設備・人を含んだ理解の必要
- * 司書教諭の役割と意義の理解—法的根拠に基づく：
時代とともに変容する司書教諭の役割の理解
カウンセラー・コンサルタント・コーディネーター・ファシリテーター

↓

即戦力のある司書教諭の養成

単にメディアの活用だけでなく、もう少し授業の中で考えるあるいは考えたことを表すためのメディアの活用というような大事なことがあるのではと思いました。授業をもつ実践者としての私が、学校図書館を少しでも理解してもらおうと思っていたことは、学習指導における学校図書館の活用の理解です。なぜ使うのかという根幹を理解してもらいたいのです。ここを理解していれば、司書教諭になっても学校図書館を使うと思ったのです。それはメディアだけ

ではなくて、学校経営の立場とは違う意味で、資料とか設備とか人を含んだ理解が必要で、ここをやらなくてはいけないだろうなと思いました。

それと司書教諭の役割と意義への理解も必要です。先生方は学校図書館は大事と言いますが、教科が忙しくなってくると、学校図書館は大事だが教科が忙しいので学校図書館を活用

する時間がないと言い、学校図書館が第二になってきます。そのような状況で司書教諭になったとしても意気消沈することのないように、学校図書館は学校図書館法という法的根拠があると指導の中で言っています。そうでないと一人職場なので、理想と現実がかけ離れればかけ離れるほど、気が滅入ってしまうようなこともあり、司書教諭としての役割をためらうこともあると思います。そのあたりの理解もしておいてほしいと思います。このことを学校図書館を活用する中に入れていきたいと思いました。アメリカのメディア/学校図書館基準の中で、10年ごとに出されるものの経緯を追っていくと、はじめは授業のカウンセラーである、あるいはコンサルタントであるものから、学習計画を立てていく・学習指導のコンサルタントになっていく、次は学習計画そのもののコーディネーターになっていくというように、授業を構成する初期の段階から司書教諭は関わっていくのだということを、基準の中でどんどん食い込ませています。それと同時に、今、言われているのはファシリテーターという、教えるだけではなく授業で励ます、生徒たちがスムーズに物事ができるように仕向けるという役も担っていることを言っていかなければなりません。それをやって最終的に何になるのかというと即戦力のある司書教諭になってほしいということです。少なくとも司書教諭になったときに役立つ引き出しを作っていければという授業をしようと思いました。

2-3 講義概要

- 1クラス：30名強 夏季集中
- 2クラス：30名強 司書教諭養成
1 選択科目として
- 1クラス：10名弱 1 選択科目として
- 場所：教室(PC,DVD可)と 図書館
- 教科書
- 『新訂 学習指導と学校図書館』
堀川照代 2010 放送大学テキスト
- 配付資料
年表、各種プロセス参照表、各種グラ
フ、ワークシート、支援資料サンプル
(パスファインダー、ブックリスト、図書館マッ
プ)、ルーブリック、評価表など

- 授業の構成
- 講義 7回 (含画像視聴)
演習 7回 (含発表2回)
見学 1回
- 評価
- 試験
提出物：個人のもの、班のもの
相互評価
自己評価
教員の評価
(作品完成までの期間巡視による評価)
教員の発表内容と作品の評価

講義概要です。夏季集中と通常の授業(司書教諭資格科目2クラス、選択科目として2クラス)を持っています。夏季集中の1クラスは30名強、4日間で14回教えて15回目にテストをしています。司書教諭資格科目としての授業が2クラス、あと、通常の授業で選択科目に入っています。他の司書教諭の科目を取っていないくて私の科目だけ取っていることがあります。NDCを知らない学生が半分ぐらい、パスファインダーを知らない学生がまた半分ぐらいいる中で

やります。同じ大学の中で6時間目にもあり、社会人の学生などがいる10名ぐらいのクラスです。DVDと持ち込みのPCが使える教室を使っています。マンネリになってくると10名ぐらいのクラスでは図書館を教室代わりにして授業を進めたりもします。教科書は今年新しいのが出ましたが、放送大学のテキストでもある『新訂 学習指導と学校図書館』(堀川照代編, 放送大学教育振興会, 2010)を今は使っています。

2-4 授業内容

- 学習指導要領における戦後の日本の学力観の変遷
- 日本の学校図書館史
学習指導要領での表記や出版物から見る
- アメリカの学校図書館史
図書館の役割と図書館スタッフの役割の変遷
- 学校図書館の利用指導理論の紹介:
アメリカ・カナダ
- 学校図書館の支援方法: 直接支援と間接支援
- 成果の発表方法の紹介
- 演習: 課題に取り組むことから発表・評価まで
調べ学習(含探究学習)の体験から司書教諭の支援を
創造することまでを含んだ発表



まず学習指導要領の変遷をやります。どういう学力がその都度求められていたかというのを、日本で起こっていた他の出来事や世界のできごとを見ていき教育というのも教育界だけで起こっているのではなく社会事情や国際事情の中で揺れ動いているだということを理解し、どのような教育問題がおこってきたのかという理解の中で、なぜ探究学習や資料を使うということをしなければならないようになってきているのかを戦

後史の中で理解できるようにします。配付資料として、まず自作の年表を配ります。その中で視聴覚資料を見せ何が起っていたのかということを疑似体験します。細かいことよりどういった流れがあったのかと、その原因と結果を理解させます。各種情報活用のプロセス参照表は、この教科書に堀川先生が自分のプロセスを書いてあり、その横にリテラシーの内容を書いておられて、私は結構、気に入っています。それと Big 6 スキルズとカナダの Inquiry と日本のモデルを併記し、いろんなプロセスがあり、どれを取るということではなく、流れを見てくださーと一覧にして紹介しています。あとは支援資料は、グラフィック・オーガナイザーとして、曼荼羅シートとウェビングシートの紹介、支援資料サンプルとしてパスファインダー、ブックリスト、図書館マップなども用意し、自作のループリックも配付しています。

2-5 授業事例 1 学生用授業予定表				
授業 1	授業 2	授業 3	授業 4	授業 5
<p>授業のねじり部 アベスの説明 アベスの説明 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>
<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>
<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>
<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>	<p>読者の 読者の 読者の 読者の 読者の</p>

授業予定表です。第1回の授業の時に配ります。授業はだいたい講義7回（映像視聴2回含む）、適宜、ブックトークなどのビデオも見せます。演習は7回あって2回を発表に充てています。見学は毎年1回ずつ入れていて自分の勤務校や近くの公立中学校に連れていきます。勤めていた時は夜の学生にも勤務校で資料を使わせて発表案を作らせていたのですが、今はできないので、昼間の学生を連れていくときに夜の学生にも声をかけて行ける人は連れていきます。

評価について、試験をしないと安心してしまうので、知っていてほしいことの試験をします。提出は個人のものと班のものがあります。相互評価と自己評価の表も作っていて評価させ、全部点数計算してあとで何点以上は何という割り出しをします。私の評価も入ります。11月後半に班に分かれいろいろ活動するときから、班ごとの名前を表を持って各班の作業内容を確認しながら何をやっているか机間巡視します。やり取りの中でできるだけ顔も覚えて、足りないところはそのまま場で注意できるように進捗状況を確認しながらやっています。

学習指導における戦後の日本の学力観の変遷のあと、日本の学校図書館史をやります。これは学習指導要領に表れてくる図書館の表記、文部省が出していた出版物の紹介もします。その後、日本と先駆的なアメリカの学校図書館史をやります。アメリカの場合は数量的なものだけでなく、スタッフの役割がものすごく変遷してきていて、時代を上手く捉えた形で学校図書館が発展してきていることを説明していきます。アメリカが100年近くかけていることを、日本は追いつこうとしてこの10年20年で同じことをやろうとしているけれども、情報化の時代になってきたから同じような認識がもてるようになってきたとか、以前のように、それはアメリカでやっていることだから日本では無理と言われる状況ではないという説明をしています。それ以外は学校図書館の利用指導理論です。私がこの教科書を選んだのは、堀川照代先生が利用指導理論の解説を書いておられるからです。それが1960年からのリソース・アプローチ理論と80年代のパスファインダー・アプローチ理論、90年代以降のプロセス・アプローチ理論の3つで展開されています。そこでパスファインダー・アプローチが出てくるので、理論を紹介した後に具現化されたものということでパスファインダーを見せることができます。理論名がただ羅列されているよりも、それぞれの理論の内容を簡潔

に書いてある方が学生にも理解できるのかと思い、この教科書を使っています。このあたりまでが理論です。

その後、こういうことを念頭に置いたうえで、では学校図書館の支援とは何ができるのだろうかということをやっています。図書館マップを作る、ブックリストを作る、パスファインダーを作る、ガイドンス、ブックトークなど学校図書館で行われている支援方法を直接、間接という言葉を使いながらいろいろな事例を紹介していきます。ここまでで方法論と理論がわかり、歴史的な経緯で学校図書館を使わなくてはいけないこともわかったことを前提にして体験学習に入っていきます。体験学習では調べ学習と探究学習の違いも説明します。教育実習や就職活動などで抜ける学生がいるので、授業予定表で進捗状況をわかってほしいことと、15回目でどのような提出物が必要かもわかるようにしてあります。

2-5 授業事例 2 課題と発表方法の選択

- 課題の提示→複数の課題から選択
- グループ（班）が複数作れるとき
グループによる討議、課題設定→情報収集・評価・まとめ発表（ポスター作成・全員での口頭発表）→評価（自己による省察＋相互＋教員）
- 複数のグループ(班)が作れないとき
グループによる討議→情報収集・評価・まとめ発表（ポスターなどの作成・ディスカッションの導入）→評価（自己＋教員）

授業事例です。課題を提示します。私も楽しみたいと思い、今年から三つの課題を作ってみました。三つの中から学生たちに選ばせて、やりたいものを多数決でやっています。班が複数作れるときはグループ討議をさせます。プロセスの表などを隣に置かせて、これは生徒にさせるものではなく、先生としてのあなたが頭に入れておいて、もし生徒が困ったときあなたが振り返って生徒の支援の参考にするものだと思います。これをまず生徒に提示してしまうと、生徒

はこれを埋めたらいいのだと思い、本末転倒になる可能性があるので、その辺は注意しなければいけないけれども、司書教諭であるあなたは今これが必要であると言ってから使うようにしています。そしてまとめて発表します。社会人のクラスなどでは複数の班が作れないので、相互評価ができません。グループ討議をして情報収集、ポスター作成まで同じにするのですが、ディスカッションを導入して意見を交換する形にもっていきます。なかなかしゃべらないのですが、人数が少ないので何かしゃべらないといけなくなっています。

<p>2016年 課題</p> <p>生徒になったつもりで、修学旅行に向けての1日自由行動のプランを立てる プランは、自由行動を各自が都への修学旅行中の、 移動目標は伝統的景観である京野草を貫すことから、京都の歴史、地理、文化（民俗学）を学ぶ。</p> <p>京野草の景観と自然環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 集落：市街地から約4km ● 出典：930 ● 築城開始：1630 ● 砂ずり、土防の交通機能を利用すること。タクシー利用は不可。 ● 「御所前」→「石見茶屋」「江戸下町」が利用できる範囲を超えない。 （商業施設は任意可） ● 使えるお金は1000円以内（経費表、入料金などに使用。資費はふくらまない） ● 行程は、ある京野草の集落を他地へと通する。 ● その京野草の特徴と趣意・役割等、必要に応じて説明に含む。 ● 路線の終点とされた特別な景観や文化について紹介する。 ● その京野草の特徴をいけしめたり料理として紹介し、調理法を紹介する。 ● 見学先への約束で、見学に必要な事前準備を述べ、（例：時間調整、入庫料） テーマとどのように関係し、見学がけが期待する。 ● 食事の場面に1時間アサインを含む。（食事をする場所は場所の指定は不要） ● 条件を満たさないプランでは、一日自由行動は認められない。 <p>行旅書</p> <p>オリジナルのテーマで書くこと。旅日記などの類のものとは趣意ない。</p> <p>図・グラフ・地図はオリジナルのものでいい。サイトからのコピー＆ペーストはしないこと。</p> <p>発表形式</p> <p>1人</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) この議題での発表はポスターセッションとする。 審かにも、並ぶものではないで構わないこと。 使った情報の種類と信頼性を掲載すること。 記載方法は、情報カードの品のよさに書くこと。 (2) テマや決定まで、グラフィック・オーガナイザーを記入。絵の仕上げは任せてもらう。作品仕上げていくこと。 (3) 発表フォーマット仕上げる。発表時間の全員でやること。前半は課題を仕上げる生徒で、そのようにしてテマを決めた後から、テマに沿ってどのような記事を開発したかなを話し、後半はそのような生徒の得意げな発表を受けるための学習教員としての具体的な支援方法とその目的を話し、またそのとき、学校行事の意義、芸術活動の意義を定めてみる。 	<p>タイトルはオリジナルで、引くつけるものにすぎない 班 構成メンバー名</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1日のタイムテーブルをポスターに書く ● What 京野草は何を建築するか。誰に京野草について（経歴等） ● Where の地域でとれる。その理由は（地形・気候） ● When いつごろからできているのか、いつ完成されたか（歴史） ● Why なぜ、京野草として売られたのか（ブランド力） ● Who とのつながりがある一歩進んでの発展に結びついているのか <p>生産者の人数</p> <ul style="list-style-type: none"> ● How どうにか間に合っているのか <p>誰に京野草の特徴をいけしめたり料理として調理法を紹介（2冊）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 京野草の目的地の住所番号も1つだけ（住所のみの必要な事項） ● なぜ京野草に誰んどこかを養育のための考え方があてられているのか ● 行旅書籍の建築物を地図に書き入れる <p>以上をこのシステムに書くことで、分りやすいように整理する。</p> <p>文型・文章・グラフ・写真・地図など（オリジナル作成）とのバランスで整理</p> <p>誰んだ京野草が京都で販売されている理由を述べる。</p> <p>発表次第</p>
---	---

次に課題です。実際に使っていた二つの課題を融合しました。一つは京都私学のSLAで、先生と学校図書館のスタッフで課題を解決しようとする研修会のもので、京都へ修学旅行に行き、一日のフリープランの計画を作る、その時に使えるのは京都の一日乗車券と旅館を何時に出発して何時にロビーに帰ってくるという制限がつけられている中で考えるというも

のでした。これをはじめた一年目、学生は遊ぶところと食べるところしか書いてこないということがわかったので、これプラス高校3年で家庭科の食物の時間にやっていたものをアレンジして、京野菜と行事にまつわるところを選んで一日フリープランを立てなさいということに変えました。自分の班の京野菜を調べるだけでなく、他の京野菜も全部5W1Hに当たるところは調べなさいとして、この課題に取り組ませています。京都以外の学生が多く京都のことをあまり知らないの、この課題が面白いということで今でも残っています。今年課題を変えようかと思い他に二つ作ってみました。一つはディベートでも使っていますが18歳に選挙権を与えるのは賛成か反対か、もう与えられていますますが本当にどうなのかと、正解はないが自分たちでちゃんと論立てて答えをださないといけないという紹介で、この課題も選択の一つにしました。

課題：18歳に選挙権を与えるのは妥当か妥当でないか

今年7月18日に実施された選挙は〇〇県選挙？

主権者として国民の権利と責任を担う選挙権を18歳から与えること

1. 日本の政治的システムを占める国政の選挙権は何か？

2. この選挙権の第一に重要な役割は何でしょうか？このことからこの選挙権は第一の〇〇選挙とも言われます。

3. では第二に重要な役割は何でしょうか？

4. この選挙権の権限をどのような方法で決めますか？

5. この選挙権は二つの議会の一つによって成り立ちますが、それは何と何ですか？

6. 二つの議会のそれぞれの特徴を述べてください。①議員定数、②任期、③選挙権、④選挙制度

7. なぜ、選出方法や任期などを異ならせている理由は何ですか？

8. 2の期間での議会の成立はどのような方法ですか？

9. 2の期間で必ず議決がひらかれるのはどのような議決がなされた場合ですか？

10. 2の期間での議決が異なったときはどのようなことが行われますか？ 3つ述べてください。

11. 議決が成立される場合はありますか？

12. 現在日本の選挙では、四つの原則に基づいて行われています。四つの原則とは何ですか？

13. 日本のように、主権者である国民が選挙権を行使し、選ばれた議員に法律を制定する力を委ねる制度を〇〇主権といえますか？

14. では、国民が選挙、すなわち国民が国を運営するような政治体制を〇〇主権といえますか？

15. 今年、選挙年齢が引き上げられましたか、それは何という法律の下で引き上げられましたか？

16. 今までの選挙で、参加しやすい方法を実施したことがありますか？

17. 選挙の中で、比例代表選区制というものがあります。これは、どの選挙で、②のように行われますか？

②なぜ、このような制度を導入したのでしょうか理由を考えてください。

18. 選挙制度の代表的なものとして、①一人の候補者に投票し、一つの選挙区で一人が当選する制度を何といひますか？

19. 政治について同じ考えや政策をもつ人がつづき、政権を担うことをめざすグループを何と言いますか？

20. 政権を担う政党を何と言いますか？担当していない政党を何と言いますか？

21. 政治への参加として選挙があります。日本は近代国家（明治時代）以降、選挙権はどのようなことがなされたのでしょうか？ いくつかの時期に絞って述べ、その理由も書きなさい。

問1 次の地図は、東京からの距離と方位が正しくあらわれているものである。この地図について、次の各問いに答えなさい。なお、地図中の経度は本初子午線から20度ごとに引いてある。

地図

課題

問題の線Fと線Gが、1965年時点の東京とパリを結ぶ日本の定期便の航空路である。当時の日本の航空路は、ほぼ最短距離で東京とパリを結ぶ現在の航空路を使用しなかった。年表をもとに当時の国際情勢に資料で調べ、ソ連（ソビエト連邦）の主張の内容とその理由を説明しよう。Z.Z.Z.Z. 固定という語句を必ず用い。なぜ日本が最短距離の航空路を使用しなかったか日本の立場にも触れ、その理由を書きなさい。

*運輸白書は参考にします。

年	出来事
1949年	航空運送法の制定が成立する。ドイツが航空に参入する。
1951年	日本空軍が航空に参入する。
1953年	アメリカが航空運送法を制定する。
1955年	ワシントン条約が成立する。
1961年	ベルリンの壁が築かれる。

もう一つは次回の高等学校入学者選抜学力検査です。ある県の教育委員会が作った試案です⁴⁾。昔、私たちの年代に東京からパリに直行では行けず、南回り、北回りがありました。それが試験の課題に出ているのですが、年表が与えられているだけでなぜ直行で飛べなかったかをまとめなさいという問題です。この三つにしてみました。

さまざまな課題が学校図書館に持ち込まれます。一番目は広く多角的に調べて自分の知らなかったことを知っていく、二番目は自分たちの意見をはっきり言わなければいけないので、賛成反対の情報をきっちり集めないといけない、その時の支援を司書教諭としてどうするのかをしっかりと考えなくてはいけない、という言い方を学生にしました。三番目の場合は、解答を出さないといけない、正解を生徒たちが教科書以外で学ぶという場合はどういう資料が必要か、まずそこを考えてくださいと言っています。学生に選ばせると与えられるよりは自分たちで選んだ課題なのでやろうという気になります。



夏は集中でやり、資料もなかなか揃いませんので、修学旅行の課題をずっとやっています。課題の理解もよくとても優秀な学生です。インターネットの資料も見ますが図書の資料が多く見られます。4班中、何班かは全部インターネットでやっていますが、如実に、本をたくさん使っている班の方がオリジナルがあって深みのある発表ができています。京都という課題が出たら、京都は観光に力を入れていますので市販以外に手に入るものがたくさんあります。司書教諭はそのようなところにも目を向けていかなければいけないと言っています。それを生徒たちが手に入れるか、もし生徒が無理な場合はあなたたちが先に手に入れておくことも大事と話をします。夏季集中の場合は時間が限られているので、図書館外での入手可能な資料は私が用意しています。いつも発表の前半は模造紙にポスターを書いて生徒の気もちになって課題に取り組んで発表します。後半は発表までの段階で一番困ったのはどこかを話します。この問題に取り組むときに、この授業はポスターを作らせるのがメインではなく、作る過程でいつも司書教諭としてのあなたを認識しておくことと私は言っています。わかりにくければプロセス表をもう一回見て、課題を解決していく中で一番困るのはどこか、あなたたちが困ることは生徒たちはもっと困るので、困った子がつまらない、こんなのやりたくないと思わないようにするにはどういう授業、支援をしたらいいのかを考えさせます。そこで学生は先に学んだいろいろなツールを使って、どういう目的でツールを使うか後半に発表します。今回、模造紙を使いたくない、オーバーヘッドプロジェクトで A3 の紙に書いてやりたいという班がありました。認める代わりに、相互評価の最後にプロジェクトを使って見せる方法と、模造紙を使って見せる方法の効果は何かという課題もつけました。オーバーヘッドプロジェクトの方が確かに見やすいが全体が見られないから、しゃべる人はクリックする時に絵と合わせなければ効果は半減するという回答が出ていました。模造紙は俯瞰的に見えるので、どういうことを発表するのかを一目で見ることができ、作る側も模造紙の方が達成感があるとの回答もあったので、一つの経験として発表の最後に学生に伝えました。

2-5 授業事例 3 演習の学生の発表
～学校図書館・司書教諭のBefore&After～

<ul style="list-style-type: none"> □ 図書館に居る人 □ 貸し出しをする人 □ じっとしている人 □ 何をしているかわからない人 □ 学校司書と司書教諭の区別がつかない 		<ul style="list-style-type: none"> □ 動的・積極的に授業に関わっている □ 色々支援の仕方を知っている □ 教員の一人ということが分かった □ 教員だからできる支援があると思った
<ul style="list-style-type: none"> □ 京野菜を調べるなんてつまらない 		<ul style="list-style-type: none"> □ 調べてみると色々分かって面白かった

最後に司書教諭としての支援も発表した後で、この授業を取ったビフォー・アフターとして、学校図書館と司書教諭に対する感想を発表してもらいます。毎年同じような回答です。授業を取る前は、司書教諭は図書館にただいる人、本の貸出をする人、じっとしている人、何をしているかわからない人、学校司書と司書教諭の区別がつかないと言います。それが見学に行ったり司書教諭の話を聞いたり、授業を通して変わってきます。学生は、司書教諭は動的、積極的に授業に関わっている

というのがわかってきたとか、いろいろな支援の方法を知っていると、教員の一人ということがわかった、教員だからできる支援があるということがわかった、と言います。今年は京野菜を調べるなんて修学旅行の計画なのにつまらないと言ひ、色々調べた学生が最後の発表で調べてみていろいろわかったら楽しかったと言ひました。楽しい、面白いという感覚をもってもらうのがいいのかと思います。

おわりに 授業の課題 1

- 学生数
 - 200名以上（2000年当初）
 - 大教室で殆ど座学、動画視聴、講師の実演
 - 30名～50名
 - 夏季集中：演習活動の制限
 - 選択科目としての履修：NDCなど専門的知識なし
 - 時間割の空白埋め←意欲
 - 10名 発表形態の制限
 - グループ学習での相互評価の難しさ
- グループ学習維持の難しさ
 - 秋季 教育実習・介護実習、就職活動による欠席
 - とりあえず履修の学生の脱落によるグループ維持の難しさ

制限があります。通常の授業内でも選択科目で履修していてNDCを知らないとか専門的知識がない学生もいますが、15回の中でなかなかそこまで説明できないのでNDC表を渡すなどしてなんとか補っています。一番困るのは時間割が空いていたから取ったという学生です。さらに受講生10名ぐらいのクラスだと発表の形態が制限されてきて相互評価がしにくくなるので困っていて、その辺の難しさも感じています。今の学習指導要領では、生きる力が確かな学力と健康的な体と自立とグループで共生していくことが求められているので、ぜひここでグループ学習を経験してほしいと思うのですが、教育実習で授業を4回抜ける、介護実習で1回抜ける、内定が決まったので抜けるとなると結構、抜けることになります。授業計画の表を渡していても演習も抜けているので、欠席したときの授業内容についてはグループの学生にちゃんと聞くように言っています。私への質問も受けつけています。授業の一番はじめにグループを決めてしまうのですが、とりあえず履修している人は単位が取れそうな授業をいくつか取っています。授業の中頃まできて提出物がたくさんあるとわかると脱落してくるので、グループを再編成する必要も出てきてグループ作りも難しいという気がしています。

おわりに 授業の課題 2

- 学生の検索行動の変容
 - 図書館で資料を集めてくる
 - ↓
 - Webサイトの検索（主）＋図書館の資料（従）
 - ↓
 - スマートフォンでの検索
 - HP上で紹介される古文書などを利用
 - 参考文献としても記載
 - ↓
 - 課題の十分な検討が必要

一番はじめに京都教育大で教えたときには司書教諭の登録が240名ぐらい、実際に授業に出てきている人も170名ぐらい、大教室で教えていました。なぜ私はこういう教え方をしているのだらうと疑問に思っていました。できるのは動画の視聴をしたり、ときどき私がブックトークをして学生を黙らせたり、こんなやり方があるのかと思ってもらうぐらいしかできませんでした。それ以後、30～50名ぐらいの学生を教えることになりました。夏季集中もやりますが、演習活動に

今は課題学習をしたことがないという学生が多い大学で教えているので、とりあえず経験してほしいと思っています。はじめた当初は何か課題を出すと図書館で調べてきました。机には本とネット上で調べてきた資料がありましたが、2～3年前ぐらいからネットの資料が主になって本が少しくなってきました。ここ2年ぐらいは作品を仕上げる直前になっても緊迫感がなく、メディアの選択について注意していても、スマートフォンで調べてしまう班があります。去年、清水寺の説

明で、江戸時代に清水の舞台からの自殺者が何人いたかと細かい数字を発表した班がありました。どうやったかを聞くと清水寺のホームページの中に古典籍があり、そういう文言があるという答えでした。ウェブサイトがあると全部発表できてしまう状況にあり、発表してプロセスを知るということを理解しにくいのです。ネットだけでは出てこない課題の十分な検討というのが一つの課題であると思っています。

おわりに 授業の課題 3

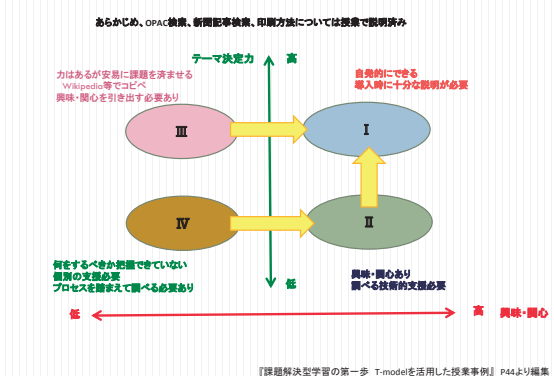
□ 教科書

- 学習指導要領の歴史的経緯について記載少ない
- 戦後の学力観の十分な記載が必要
- =なぜ、図書館を使うのか
- プロセスを重要視した章立ての新しい教科書
- 探究学習を紋切型にしない
- 規定通りにはならない
- 教員としての司書教諭の役割にも言及が必要
- 教科と図書館の繋ぐ司書教諭のコミュニケーション能力の重要性に言及が必要

今、放送大学の教科書を使っています。新しい教科書が出てきていますが、新しくなればなるほど歴史的経緯の表記が少なくなってきました。一番はじめに使っていたのは朝比奈大作先生の樹村房のもので、いまだに参考にするのですが、その『学習指導と学校図書館』（朝比奈大作編著、樹村房、1999）にはその辺のこともしっかり書いてあります。今の事例だけに追われてしまうと現場に入った時になぜ自分が司書教諭をやっているのかということの支えにはなりにくいと思います。

す。歴史的経緯を知ることは未来を予測することを助けると思うのです。学校・現場では、こう進んでいるけど違う方向のものも必要ではないかと感じることは、歴史的経緯を知らないとなかなかわからないのではないかと思います。今は情報をピンポイントで出すので全体的体系的に見るのが難しいと思うのですが、知ることの理解が必要だと思います。プロセスを重視している教科書も見受け、探究学習を紋切型でやってしまうのはどうなのかと気になりました。実際に調べ出したら規定通りにならないし、行きつ戻りつする中でどう教えていくかが大事になってくるので、紋切型で章立てされているなら、補う文章が入っている必要もあるのではないかと思います。あくまで司書教諭として知っておくことで、生徒に強要するものではないということも必要だと思ったのと、教員としての司書教諭の役割の言及というのはもう少し必要なのではないかと思います。教科と図書館をつなぐ司書教諭のコミュニケーション能力がとても問われていると思います。そこができないとなかなか図書館と教科学習を結ぶことができません。

司書教諭の指導・協働の中で：生徒の類型化調べる学習のスキルと興味・関心の類型



2011 年文科省の調査研究費（「学校図書館の有効な活用方法に関する調査研究」）をもらって、同志社四中高の司書教諭と情報科の教員とで学校図書館を探究学習に使うことを発表した時のことです⁵⁾。情報科の教員と図書館を使う場合の生徒の様子を 4 パターンに分けました。Ⅰ 導入時に十分な説明が必要だが課題を出されたときに自発的にできる、Ⅱ 興味関心はあるので調べる技術だけ支援すればちゃんとこなせる、問題なのはⅢ、Ⅳです。Ⅲ 力はあるがウィキペ

ディア等をコピーするなど安易に課題を済ませてしまうので興味関心を引き出す必要がある、Ⅳ 何をすべきなのか把握できていない、プロセスを踏まえていないので個別の支援が必要となります。40 人いたら、上の 10 人は最初の説明だけで十分できます。情報科の先生はⅡとⅢを分けています。片方は調べる技術がないからできないが課題に対する関心はある、もう一つは調べる技術はあるが課題に対する支援は必要だろうというもので、真ん中の子ども達にもパターンがあるだろうとしています。最後は本当に両方とも興味がない、関心をもっていないパターンです。課題を進めるときにそれぞれの支援がかわってくるわけです。こういう時に司書教諭のメディアのスペシャリストとしての支援があると思います。パ

ターンに分けてくると教科の支援もあります。教科を教えた先生がちゃんと支援しなければいけないところと、メディアスペシャリストのほうが支援しなければいけないところがあります。普段からのコミュニケーションがきっちり取れていないとできるものではないのです。教科の先生を巻き込みながら、教員としてのいろいろな行事や校務分掌をこなしながら学校図書館の学習を支援していく司書教諭の姿を紹介していただいて、学校図書館の中にだけいるのではないということ知らせるのも大事ではないかと思っています。

参考資料

- 「インフォメーション・パワー 学校図書館メディア・プログラムのガイドライン」 アメ
リカン・スクールライブラリアン協会、教育コミュニケーション工学協会共編 1989 全国SLA
- 「インフォメーション・パワー 学習者のためのパートナーシップの構築」
アメリカン・スクールライブラリアン協会、教育コミュニケーション工学協会共編 2000
同志社大学
- 「21世紀を生きる学習者のための活動基準」
アメリカン・スクールライブラリアン協会編 2010 全国SLA
- 「アメリカの学校図書館基準に学ぶ—IPおよびKnow It Allを中心に—」
同志社学校図書館研究会 2009
- *School Library Monthly* ABC-CLIO, LLC
- 「中等教育資料」文部科学省教育課程課編集 学事出版
- 「日本の宿題—教育」 NHK 2000
- 「日本人は何をめざしてきたか—教育」 NHK 2016

ご清聴ありがとうございました

参考にした資料は『インフォメーション・パワー：学校図書館メディア・プログラムのガイドライン』で、一番悩んでいるときに助けられました。こんなに進んでいるいろんな学校図書館があり、頑張ろうと思えました。もう一つ『21世紀を生きる学習者のための活動基準』です。今、私たちは政府の資料は信用できると教えるときがありますが、今、アメリカで言われているのは、社会的文脈の中でその情報が本当に正しいのか正しくないのかだけでなく、本当に妥当なのかどうかというところまで読みとらせようとしています。こういうことをこの次どう教えていくのかが課題になってきます。いろいろな事例の参考にしたのが *School Library Monthly* (2015年に廃刊) という雑誌で現役の司書教諭がいろいろな授業実践を挙げていて、ループリックもとても参考になりました。

質疑応答

(中村) さて、今回は今井 [福司] さんの well-organized の司会だったのですが、私はぐしゃぐしゃになるのが好き、好みでありまして、足立先生もおそらくぐちゃぐちゃが好き (笑) ？ですので、どうぞフロアからちゃちゃを入れていただいて、いきたいと思います。まずは、これに答えると私の授業の質が問われてしまいそうな質問から。まずは個人にいただいた質問にそれぞれ答えて、その後、皆さんへという、難しいのかな、という問題について考えます。「中村先生へ 模擬試験で実際に授業を行わせることについて生徒が活動する授業ではなく座学の授業 (情報リテラシーを教える?) ということでしょうか？ちょっとイメージが湧かなかったので少し具体的に伺いたいです。」足立先生は模擬授業をやっていたのじゃなかったですか？

(足立) いや、模擬授業はやっていない。

(中村) では、私だけが模擬授業をやっているのですね。これは模擬授業をやっている他の先生がいらしたらぜひ聞いてみたいと思うのですが、私自身は座学ということでは必ずしも

ないですが、何にしても教室で、大学の教室でやるという限定がついてしまいます。それで、資料のリストを作らせているので、熱心になればなるほど大量に資料を持ち込めます。それで授業が10人くらいだとすると、模擬授業の時間が2、3回、最大の時で4回とかしかとれないとなると、グループのメンバーが4人とかってということになるのですよね。そうすると、グループで司書教諭役、教科教諭役を2人ずつにし、授業を前半と後半で模擬授業をやります。多くの教科教育法の授業も私の理解ではこのような感じで行われています。例えば、国語科の授業なんかでは、グループでいっしょに授業案を作り、何分おきで先生役が入れ替わり模擬授業をするというのが、うちぐらいの規模の大学の教科教育法だとたぶん普通だと思うのですけれども。大教大さんとかっていう、ちゃんとした教員養成をやっているところはきっと違うのだろうけれども。ごめんなさい、うちがちゃんとしていないというのも…（笑）。教室でやるという制限がつく、かつ自分の学校図書館の経験がない、つまり私が授業案作りを要求しているような授業がまったく行われていないような学校の出身の子しかたいてはいない、という制限の中でやっています。教室の中に1人くらい、うちは「学校図書館が」すごくよかったとかっていうふうに本人が思っているっていう子がいる場合もあるのであります。

作ってもらっているのは単元の授業案と、単元の中の一つの日案を作ってもらって、日案の模擬授業をします。学生はよく、プロセスモデルのプロセス全部を入れた授業案を作ってきます、例えば20時間とかいるような授業案を作ってくるのですね。ですので、プロセスモデルを切り取ってよいのだということをまずわかってもらう、切り取っても授業になるのだというイメージがわからないので、それをわかってもらうということがまず大変です。それプラス、それがTTで、教科教諭役とのやり取りが授業の中で入ってなければいけなくて、と、新しいと言うと自分で言っていてなんだか変な感じですがけれども、学生の反応を見ると、学生の側からすると要求されている内容を理解するのにすごく時間がかかる内容をこちらが要求しているのです。

前回、森田〔英嗣〕先生のご発表を聞いた時に、私が考えていることと非常に似ているなと思いました。「情報メディアの活用」のお授業ですが、今、現場にいるの先生たちに考えてもらって、自分の授業として考えてもらってというものだったと私は理解したのですが、私の授業の場合はTTという問題があるので、専門性が違う人が一緒に働くということとはどういうことかという話もしているのです。最後、模擬授業なのですが、模擬授業そのものが重要かということも言い切れないところがあって、家城先生の模造紙の後半戦と同じ話だと思うのですが、模擬授業をやってみてわかることがあって、年によっては司書教諭は必要なのかということが話題になったりします。教科教諭がちゃんと勉強していれば自分でできるのではないかと思ったという学生が出てきたりもします。そう思う学生と私が信じているものとはなんで違うのかというディスカッションをしたりもします。

というところで、もう一つの質問にいきます。「学生が司書課程も学びたいというところ、どのような知識が不足していると感じるのか具体的に教えてください。」ということなのですが、例えば足立先生のお授業にははっきりとレファレンス、レフェラル・サービスという項目があがっていますが、TTすると言って、あなたの専門性は教科教諭と違うということで授業案を作りなさいと座らせたときに、教科教諭のものを外した時に司書教諭コースをずっと取ってきたけどイメージが湧かないわけです。司書教諭のコースを取ってきていてもそこまで専門職だと思っていなく、教員になりたいプラスアルファな資格を取りにきているイメージでそこまで育ってきています。だから私が、「学校経営と学校図書館」とかの授業でいくら専門職の話をしていても、それは私はかぶれた人だということになっているわけ

ですよ（笑）。アメリカにかぶれて日本にないものをずっと入れようと躍起になっている人だという話、そういう設定です。私はそれでいいですよと言って、でも私は信じていますと言っています。こういうものがあれば教育活動が変わると私は信じていますという態度で学生の前に立っています。どうぞ、奇異なものを見る目だとしてもそれでいいですから、でも私はこれがあつたらいいなと思って活動しているからと言って、こういう活動（シンポジウム）とかね、案内すると、たまに変わった人が（笑）、興味もって来てくれるかもしれないと。そういう付き合いを学生としているので、なんですかね…授業案を作って、あなたはTTで司書教諭役ですと言われてはじめて、あれ、わかっていたつもりだったけれど私、何の専門職の勉強をしていたのだろう、何の資格を取っていたのだろうみたいな話になります。コレクション形成とか言うのだって、コレクションを作ったことがなく、それを使って授業をするというのがどういうことだったのかというのも、あなたはTTで司書教諭役ねと言われてはじめて、私はそんなことはできるようになっていませんでした、すみません、みたいな話になるのです。あらゆることが不足していると感じます。特にレファレンス、コレクション、資料のことです。私は本が好きですよと言っていた、けれどそれは自分が好きな本が好きだけだった、ということに気づくだろうし、という、そういうレベルです。「図書館概論」で、本が好きっていうだけでは司書〔や司書教諭〕にはなれないのだよ、と言っている、私はやれると思っているかもしれない。けれど、ここに来て、ああそういうことだったのか、と思うと。もしかすると司書課程〔図書館司書コース〕の学生は、そのことに「情報サービス演習」で気づくのかもしれません。そこでレファレンスの演習の課題で発表させています。A3の裏表に、どう調べたか、どんな資料を見てきたか、三次資料からちゃんと見たかとか書かせて、答えを出すというような演習をします。それでレファレンス質問を並べて提示すると、好きな（問題）に固執する子も出てくる。それを、あなたはレファレンスデスクに座っていて問題を選べないのですよ、というところから話すわけですよ。だから、他の教科の人や他の、例えば小学校の免許の人と組ませて、ある程度、強制の中でTTをさせられるとはじめて、自分が思っていたこと、仕事と違うのだと気づくのだろうなと思います。お返事になっているのでしょうか？長くなってしまいましたが。

（フロア1）TTは司書教諭と教科教諭ということで、例えばそこには学校司書は入っているのですか？

（中村）すみません、入っていません。だからまあ、それがかぶれているっていうゆえんですね。「学校経営と学校図書館」の時から、この世には学校司書というグループがあるということは言っているし、日本ではこういうような二つの専門職制が主張されていて、実際に法改正もあったしという話はしています。どのような住み分けをするかということを議論している〔学校図書館担当職員の役割及びその資質の向上に関する〕調査研究協力者会議があることも話して、その資料も見せていますが、司書教諭として私はアメリカ型のそういうものを考えているので、そういう立場だとしてTTをやるとしたらどうなるかを考えてみてほしいって。でも、模擬授業のディスカッションの際には、学生たちのほうからむしろこの部分はやりきれないなって思いましたとか、こういうところはやってもらえるという前提であってほしいとかっていう意見は出てくるので。別に司書教諭っていうのは、司書教諭の科目だからそうなっちゃうかもしれないけれど、私が言っているのは、学校図書館の専門職というのはこういう動きをするものだというのを、私はアメリカで見てきて、こういうふうにあるべきだと思っているので、それを二職種制に分ける議論が日本にあるというのも理解しているし、みんなも理解しておくべきだと思っているけれども、ここではとりあえず戦後、理想的なモデルとして、「司書教諭」という形で翻訳が作られてアメリカから入ってきたの

を前提として、それが戦後、制度としてどういうふうに上手くいかなかったかっていうのはまた別の話、それによって学校司書ってというのがどういうふうに出てきたかっていうのはとりあえず置いておいて、司書教諭前提でやっています。で、現実対応の部分は学生さんに考えてくださいっていう。

(フロア1) メディアスペシャリストの専門職として TT するということでしょうか。

(中村) そうです。学校図書館の〔単一〕専門職ということとして、授業をやっています。

(足立) 今の質問に関連した質問がやっぱり出ています。「2 回しか受講していないのですが、司書教諭がアクティブに活動すればするほど図書館の根幹のインフラをきちんとする司書の必要性を感じます。司書と司書教諭の二職種は本当に必要か否かの議論をおねがいします。」というものです。これ議論しだすと大変なのですが、司書と司書教諭の概念の違いが私は気になっています。学校図書館は、一人職場で対応できるはずがなく、複数の人たちの協力が必要です。「学校経営と学校図書館」でも言いましたが、チームで経営するという考え方をもっと普及したいのです。その時に司書と司書教諭の概念をもっと整理していかないと話が進まないのではないかとと思っています。

(中村) でもね、こういうことを言うとまさに学生が出てきて、だからかぶれているのだって言われそうだけれど、私はアメリカで一人でやっている学校図書館をたくさん見てきました（笑）。やっぱり一人だからできることもあるのですよ。コレクション形成から TT まで全部一人で責任をもつからできていることもあると思います。司書教諭の仕事というのを TT の、変な話、うわずみというのか、教育活動にすごく特化したところ、マネジメントにめちゃくちゃ特化したところだけに限定的に考えることによる弊害は私はあると思います。アメリカでは私は一人の職場を見てきて、尊敬する人たちも基本的に一人職場なので、一人…例えば、高校の学校図書館の大きいようなところでアシスタント・ライブラリアン的な人がいるとか、司書教諭が 2 人、いや司書教諭と言っていいかわからないけれど、学校図書館専門職が 2 人いるところは見たことがあります。学校図書館に専門職が 2 種類以上欲しいという話はまた別の弊害があると思います。要するにそれは、仕事を分断することを意味する“かも”しれないし、もしくはそれがより外の人たちから理解されないという可能性があると思います。

(フロア2) 今の話とは全然違う方向から、模擬授業というのは司書教諭と教科教諭の TT をやったときに、生徒役が必要ではないかとどうしても思ったので、すごく不思議でした。

(中村) 生徒役は他の受講生です。

(フロア2) あっ、うーん。それは参加してないですね？授業案をする单元と授業案を出させてプレゼンさせることは私も毎回、やらせています。でもそれをどうやって模擬授業に入れたらいいのかを考えてしまいます。つまりそれは普通の座学の授業ではないので、図書館でやる場合、生徒がどう動くかがポイントになっていて、それで授業が展開すると思っています。

(中村) ああ。私は大学で行われている教員養成の現実と同じことをやっていると思っています。学生が生徒役をやって、それでも問題はある程度、見えます。生徒役をやってみてはじめて、今の先生の指示が全然わかりません、ということがしょっちゅう起きています。学生が授業をやると、先生役はもうシナリオも作り板書計画も作ってきて完ぺきと思いやるわけですが、生徒役から見ると先生が一人でどんどん進めている、というような授業がたくさんあります。そういうレベル、段階なのです。教育実習に行ったことのある学生は数名で、行ったことのない学生がほとんどなので、本当の“模擬”授業なのです。生徒の様子を見ながら授業を変えていくなど言葉のうえでは、テクニクとしては教えているけれど、例えばさっ

きの、足立先生と私はぐしゃぐしゃになっていく授業が好きという話じゃないけれども、本当に学んでいくとぐしゃぐしゃになっていくよねみたいなことって言葉では伝えるわけです。でも、教科教育法というのは、これ以上にもっと古典的な、導入→展開→など、授業を時間までにどうやって終わらせるかという話でしょう？覚えていますか、導入5分、まとめ5分…とかそういうすごく基本的なところを思い出させて、それを情報リテラシーの目標と教科教育の目標と抱き合わせによさそうな単元を探して、それを青学のカリキュラムのどこにあたるか見て、具体的にはどんなデータベースを検索させて、となるとそれだけで学生たちからしたら…生徒役の反応まで見るまでいかないと私は思っているの、大学の授業の範囲でやっています。でも、学生をいきなり中学校、高校に連れて行って、彼らに授業をさせたら、時間返せ何返せて話になるのじゃないですか。だから、まず学生同士で授業の範囲でやってみるっていうことですよね。おっしゃることはすごくよくわかるのですが。

(家城) 私は、インターネットだけでなく本を使ったほうが俯瞰のようになるというお話でしたが、具体的にどういうものか聞かせてほしいという質問です。インターネットを、スマホで見られるようになったときの発表を聞いていると、自分が入ってない、第三者的な発表になっていて、その先が聞きたいのだけど…というところで切れてしまうというような、まとまりはすごくいいのですが、そこにあなたたちの、班のオリジナルはというところがものすごく抜けているように感じます。本をたくさん読んでいる子だと、系統的に本で学んでいるので、他とは違い、本で興味をもったところをネットで深く調べています。本のもっている系統性とネットでピンポイントでしか出てこないという、その違いなのかと感じています。

(中村) 簡単に見つけたものに愛着というか、他の人に発表できるというような…はないですよ。人に噂話としては伝えられるけれど…

(家城) これは使っちゃいけないよねとか言いながら、それでこれ？と言いたくなるようなものを選んでくる。自分のやっていることと頭で考えていることが結びついているのか、という気がすごくします。なんでも出てきてしまうからかなと思います。

もう一つ、子どもたちが本と出会う方法です。人権問題を考えるという課題で本を自分たちで探させました。フロアワークをさせたのですね。そうしたら「あったー！」って子どもたちが、本を見つけ胸に抱えて帰る姿を見て、やっぱり自分で検索をして自分が見つけたという実感をもたせると違うのだと感じました。絶対、私がこの本読んでと渡しても、えーいらない、というような感じになる(笑)。違うのだなと実感して。自分が本当に必要だと思った時の資料との出会いというのは、どういう形態であろうが、どれだけ汚れていようが、その子にとっての情報の価値の違いを経験しました。できる限り、全部をお膳立てするのでなく、自分たちで探すことのほうが、子どもたちがより実感できるかなと思います。保健室登校の不登校の子を図書館に行かせていいかと言われて、私も空いている時間だったのでいいよと言ってその子が来たのですね。そうしたら、その子が資料検索をしているうちに目が輝いてきて自分で探した本を持って帰ったという経験があります。今の子は機械を触るのに長けているので、そこからどういうモチベーションで資料を探し出すかというところにももう少しポイントが置かれたら、本との出会いがたくさん作れるのではないかと思います。大学生に限っては、一番いいのは統計資料がなかなかネットに出てこないのです。京都の野菜の生産量であるとかを、絶対これは調べなさいとマスト(must)項目で入れてあるのですが、出てこないというときに、探し方で詳細検索にpdfを入れると統計が出てきます。こちらが知っていて課題を出していて、実際に経験することで、ネットだけではでてこない資料が

あるということを知ってもらえないのかなと思っています。

(フロア3) 私がたぶん質問させていただいたものなのですが、今、小学校の教師です。子どもたちはIT環境にどっぷり漬かって生まれてきているので、本と天秤にかけることすら知りません。例えば、5年生で「未来の車」について調べるとき、本はほとんどなく、インターネットに行っても、企業秘密という壁にぶつかっています。知りたい気もちがあってもどう支えてあげたらいいか、テーマによっては難しい部分があります。調べても出てこない、ダメだという経験もありさせたくない。その辺をどう支えたらいいのか悩んでいます。

(家城)「未来の車」と言ったときに実物が出てこなくても、なぜ今、実物が出てこないのかを知っておくことも大事です。企業にしたら今、これは出せないのはなぜかと言ったら、競合しているからできないのかもしれませんが。「未来の車」とは何なのか、をもう少し考えさせていけば、一つの正解に到達するのではなく、バリエーションに富んだ答えで終わっても、それはそれでいいのではないかと思います。そのためには少し前の車、古い車を知っていて、それが今、どういうぐらいに改良されていたか、過去においてはこれが未来の車だったかもしれない、ということも知っていくともう少し多角的に出てくるのではないかと思います。未来の車と言って一つに絞られるのではなく、この子にとってはこれを解決したいからこれが未来、という考えがいいのではないかと思います。

(足立)では、別の。シンプルだけど、大変難しい質問です。「探究」をどう教えるか。学校にどう組み込むか。みなさんの経験をうかがえたらありがたいです。」

(中村)こちらに似たものがあります。「探究学習、探究プロセスについて…総合的学習などと教科では共通点と相違点があると思うが、どのように考えますか？」

(足立)いつも、講義の時に話しますが、探究というのは英語ではinquiry、問うことなのです。問いがなければ探究ははじまらない、疑問をもって調べようとするのが探究です。先ほどの家城先生の話にもあったように、問題意識がどこまで強いかが大切です。そこを捉えていけばプロセスはあまり関係ないように思います。探究を試行錯誤でやっている間に、混乱が生じたときにきちんと整理してあげるのが我々の役割ではないかと考えています。特に矛盾に直面したときに、その矛盾をどうやって解消していったらいいのかという問題意識があるときに探究は進むのではないかと思います。そういう探究を学校にどう組み込むかが一番の問題なのですが、教員仲間としていろいろ話し合って、総合学習でも教科学習でも、カリキュラムを考えるとときに、生徒がどういうところで躓くかを考えたり、生徒が疑問をもって自分で考えていく授業を少しでも取り入れてみてはどうですかという相談を地道に繰り返していくしかないということしか、私にはわかりませんが、家城さんどうですか？

(家城)「総合的な学習の時間」というのは探究の最たるもので、答えがなくどんどん多角的に本質を調べていくことなので、ちゃんと情報が集められていて、みんなが納得できていれば、いろんなものがでてきてもそれでいいのかなと思います。「木曾の最期」という高校の古典の授業で、教科の教員から一回、図書館でやってみたいと言われて。桑田てるみさんの本の中にも「木曾の最期」が出てくるので⁶⁾、参考にさせていただいたのですが、まずは教員からこの単元の学習のねらいなどの説明してもらいました。そのときに先生のやりたいことがわかりました。鎧兜の用語が出てくるところ。教科書は赤色の綴(しころ)と出てくるのに、副教材では青色の綴が掲載されている。すごくいいかげんなんや、と聞いて、正確に資料を提示したいのなら図書館に任せてもらえたらいいということです。はじめは本文を理解するために、出てくる言葉を調べさせたいと思いました。でもそれも面白くないなと思って、最終的に焦点を定めたのが、絵本で、平家物語って結構、難しいのがありますよね。あれを読

んで、それを全部、PDF に落として、プロジェクトに映して教科書に出てくる前までを私が現代語で読み聞かせました。古典に入る前までを現代文で理解させて、授業に入ってもらったのです。その後、図書館を使った授業のアンケートを取ってもらくと、どちらかと言うと古典が苦手な子はわかったと。文法の個々の意味はわからないけれど、全体がわかるから、これはこういう意味かな、推量かななどと考えられたと。教科の先生だと、まず最初に文法を教えていき全体を教えるので、図書館を使った授業は真逆になったという経験があります。古典ができる子からは、進学コースの子たちだったから、今までのやり方と違い、慣れていないので面倒くさかった、はじめから文法などの解説を詳しくしてもらった方がいいと評判は悪かったです。でも、ちょっと苦手な子たちがいるなら、教科の導入部分としてこのような図書館の使い方があるかなと思います。細かく文法的解釈から積み重ねていき全体をわからせるのではなく、がさっと概要を把握させてから、大意を取ってから個々を見ていく形になってくるので、司書教諭が加わる授業ではそこが変わるなという経験をしました。

(フロア 4) 図書館として何ができるかということと、探究型の勉強をしていくことがまったく同じということはないと思うのです。総合、SGH、SSH においては、自分の身の回りのものから課題を発見して、それを解決するのにに行けるところまで行き着いて、ここまでまとめたけどここは課題で残りましたというようにやっています。教科の場合は日本の教科で指導要領がある以上、例えば高校 1 年生の古典でここまで行かなきゃという、やっぱり目標が最初からあるわけです。そこにたどり着くために探究的にできればいいと思うのですが、それがすごく難しいのです。プロセスとしては行ったり来たりがもちろんあるのですが、教科の専門家と情報のプロがガイドしていく必要があります。教科の目標がはっきりしていないと、ガイド、サポートのしようもないとなっていきます。そのあたりが、総合と教科で違う部分があると思う点です。もう一つが、学校でどう取りこんでいくかというのは、教科で取り込まなければ、学校でこれ以上広がることはないと思っています。がんばっている総合のところはやるし、がんばっていない総合のところはやらない、ごまかすところはごまかすというのが現状だと思います。教科の授業をする先生の中で、ああこういうやり方で生徒が自らががんばってたどり着くのだなというような、がんばってみようかなという経験をする先生が増えるしかないのかなと思います。ということで、私の学校では図書館がコラボをしようと働きかけて、強制的に研究授業をやらうとしたりしたから、そのために私がしんどくなっているのですが (笑)。まあ、大学の先生などのサポートを受けながら、なんとかやっているといるのですが、やはり、教科でやっていくことの難しさというのは、教科の中にすでにこの学年のこの教科はこれをやるものだよという目標がクリアに設定されていることが、はっきりしてはいるのが難しいところではあります。

(家城) 総合と教科はやりにくいかもしれないけど、国立・公立のことがよくわかっていないのかもしれないですが、教科同士で似た科目がありますよね。テーマを設定すれば。

(フロア 4) 教科横断型ですね。それはわかるのですが。今は図書館と…

(家城) 教科横断的な単元を、図書館でしてもらおうというのは…

(フロア 4) 教科と教科のコラボレーションはさらに難しい部分があります。時間が合わない。度も合わせなくてはなりません。時間も進度もバラバラで生徒の中で統合できるようにカリキュラムの順番を入れ替えて組むのは可能ではありますが、よほどそこに特化して優先順位をあげないと厳しいのが現状です。

(フロア 5) [授業に役立つ学校図書館活用] データベースの中に、[東京学芸大学] 附属高校の、高校の現代社会と生物と一緒に、生命倫理を考えるというような授業をやったというのがあります。たぶん 3 年くらい前だと思うのですが、研究発表会でやったので。だから、

設定の仕方次第というのはあるかなと思います。日常的に絶対、毎年やるんだよというふうになるのにはかなり時間がかかるけれども、やっと、そういうことを試みってくれる先生が現われたという状況かなと思います。

(家城) 教科は一人の先生がちゃんと責任をもってずっと見ないといけなというようなことがあるのだけれども、この部分は保健の先生が保健的なことを、理科の先生が生物学的なことを講義する、社会的な背景の部分は社会科の先生がするというようなことで、一つのテーマを基軸にしてやれば一つの教科の中でもできないことはないと思います。そこの単元をそれでやったことにしてもらえるのならですが。私学ではやろうとしてもその教科に名前を連ねているその一人の先生が授業をやって、評価をするところまでがその先生の責任となるので、司書教諭が関わろうとしても成績がつけにくいから無理とか言われます。それが、国公立ではどうかかわからないのだけれども、その辺に風穴を開けていけば教科でも単元が違って真ん中に司書教諭という人がハブでいれば、成立すると思います。

(フロア 4) それは教科横断型のコーディネーターとしての司書だと思います。探究型の学習を進めるうえでという話となると別の役目がいると思います。教科の中の探究のやり方と総合的な学習の中の探究のやり方は同じでない、いや、同じだと思うのだけれども、なにか違うのです(笑)。それは一つは評価の仕方というのがあると思います。教科の場合は最終的に評定や成績とつながってしまうので、その難しさは実際にあると思います。

(家城) 結局、探究型でやっても最終的にはテストをして点数が取れていたらいいということですか？

(フロア 4) そうではありません。そうしたくないので困るというか、難しいのです。司書教諭はその教科を担当していない、その教科の教員免許をもっていないので、そこに口出しできるのかどうか非常に微妙だと思います。

(フロア 6) 私が授業支援していた時に感じていたのがまさにそれで、教科の先生のねらいがはっきりしていないとぐちゃぐちゃになってしまいます。先生自身に図書館を使って何ができるかというイメージがあまりないと、図書館を使うことにばかり気を取られていたりするのです。だから、生徒に対するレファレンスのように、先生に問いかけます。評価するのは先生なので、図書館を使って普通の教室ではできない何を求めているのか、先生自身に言語化してもらわないとにつきもさっちもいきません。それができると図書館で何をさせてそれをどう評価するかという話に自動的になります。生徒が探究で行き詰っているときにレファレンスするように、先生に問いかけていくことが司書教諭の役割なのかなと私は思っています。授業をするのは先生なので先生自身にねらいをはっきりもってもらわないことにはどうしようもないというのは授業支援していてとても感じます。そこまで見据えて、図書館での授業に取りかかってもらわないと、いったい、その授業で生徒に何の力をつけられたのかがわからないものになります。

(フロア 4) それでも図書館でやろうという気がある人はありだと思います。対話をするうちに何かが明らかになるという気がして、それが仕事かなと。

(中村) 少しずれるかもしれませんが、司書教諭資格を取ろうとしている学生と一緒に授業案を作ろうとしていると、学生は教科教諭の気分でのいるわけです。彼らがつまずいているように見えるのは、[課題は]教授法の改革だと思っているのです。調べ学習的にすれば中村が考えていることができるだろうと思っています。自分の教科の教員としての立ち位置は変わらないままに、調べる要素が入っていて、子どもが主体的になっているようなもので、資料をいろいろ使わせていけばいいのでしょ、と考えています。私が言っているのは教育の方法と教育の内容の改革だから、両方が入っていないとダメと言っています。教育の内容の改

革とは何だとなった時に、まず一つは情報リテラシー、プロセスモデルという言葉があります。もう一つは探究で、教科書は、掘り下げればいくらでも掘り下げられるのに、それが掘り下げられない、ある程度、固定的な知であるかのように書かれているので、それが子どもの思考を遮っていると私は考えていますが、どうだろうかやってみようという感じなのですよ。だから、彼らはやはり教科教諭の、時間の中でどこまで教えるかという発想からはじまっているので、そこを解きほぐしていく。学生は、中村が言っていることをやろうとしたら、一つの単元が20数時間とかかかる、とか言ってくるのですよ。いやいや、それは、あなたが一回の単元で、プロセスモデルを全部を教えて、情報リテラシーがすべて身につくみたいなことを考えているからで、私が言っているのはそういうことじゃないんだよと言って、少しずつ少しずつ、こっちが教えたいと思っていることは何で、それが教科教育の発想の中でやってきたことと照らし合わせてどうできるかと考えてもらうのには、学生との関係がすごく必要になります。なので、内容というものの…ところで、「総合的な学習の時間」は今の学校現場でどのくらい目標がありますか？「総合的な学習の時間」は目標がない、ある程度、オープンエンドな感じですか？

(フロア4) そういう学校の方が多いのではないですか。オープンエンドというか何らかを解決する、発信しようというか。

(中村) 教科教育の角度からも授業案について目標を設定しなさいと言っていますが、それについても問いかけているような気がしてきました。今までの教科教育で設定する目標でなくていいのだと問いかけているような気がします。でも、そうすると全部が「総合的な学習に時間」になっていて、問題があるような感じがしてきました…

(フロア7) さっきの先ほどの問いが大事だというのがまさにそうだと思います。未来の車とはという話がありましたが、車はたくさん事故を起こして人をたくさん殺したりするわけです。私たちは車と今後どうやって付き合っていくことが求められてくるかを考えるなどすると、また違ったものになってくると思います。今、伝記を教えるというのを私のところではやっています。伝記を教えるというのはどういうことなのだろうか、伝記とは人の人生を語っていて人の人生はどうやって語ることができるのだろうかといった問いの立て方だってね、できると思うし。読み方でまったく、変わってくるし。どんな情報が込められていて、Aさんが書いた手塚治虫とBさんが書いた手塚治虫はどこが同じでどこが違うのか、AさんとBさんの表現はどこで違ってきてしまったのかという話になってきて、とても探究的になるような気がします。うまい問いを作れば、中村先生が言うような、深い学習になっていくと思います。うまい問いを作れば、ですよ。

それを子どもに考えさせるのは無理なので、うまい問いを先生が与えるということが必要です。問いが違くと学習も全然、違うということが体験でき、自分で問いが出せるように納得いくような気がするのですよね。大学で教科の先生を相手にしてやっていると、教科の先生からは抵抗を受けます。こんなの何時間じゃ教えられません、とてもじゃないけど探究なんて教えられません、大学には受かりませんとか言われ、組み込めないなあと思います。でも、内容だって変えていいし、今の目標の立て方でいいのかというところに疑問をもつと、中村先生がおっしゃっていたように方法だけの変化じゃなくていいのだということまで行き着ければ、違った世界が待っているような気がするのですよね(笑)。バカロレアとかでやっている探究とはまさにこれなのではないでしょうか。深い学習と今、言われたような、そういうものを引き出す問いがあるのではないかと。

(フロア8) そういう力をつけたいという必要性は、気もちは、すごく学校の中に転がっています。では、それを誰がやるのかとなったときに専門家がいますよねとなり、私がやるよう

になっても体は一つしかありません。今でさえ 21 時間あるのに、また 2 コマ増えるの、とか。本当はどの教員もできて当たり前になってのこないと探究というのは学校の中に浸透しないと思います。状況として、今、私の学校では、必要性はたくさんあるけれど、実際に私も動けないし司書さんも動けないという状態で、先生に頑張ってもらっています。今、学校の中は変革しているので、今の学習指導要領の改訂からすると能力をつけたい、生徒のモチベーションをつけたいなど探究的要素の資質だとか能力だとかは、学校の中にとっても転がっていて、それをキャッチしようと思えばいくらでもできるのだろーうと思いますが、正直、今、力不足を感じています。よく管理職に言われているのが、あなたの複製を学校の中にいっぱい作らないと、それじゃないと図書館が学校の中に浸透しないでしょうと。それができていないのが今の状態です。

(フロア 1) 今の問いのことなのですが、やっぱり教科でやるならば、その教科を知っている先生が問いを引き出さないとだめになると私は思います。探究で生徒が本当に自分で問いを立てられるなんていうのは相当、相当、後で、それを小学校でやろうと思ったら、ある程度知識の概略をきちんと、あるいは教科の内容をきちんと把握している先生が発問するという形をやっていけば、探究的なものが生まれてくるのではないかと思います。探究的な学習というと全部、生徒が背負う形になってしまっているが、それには段階があるし、発問をもう少し上手にやっていかないと、引き出せないのではないかと思います。

(家城) それは現場にいてもものすごく思いました。図書館にいて資料の提供はできるのだけれど、やっぱり発問というか…留学してきた先生に探究のようなことをさせると、何か違うのです、課題の出し方が。で、こうすればいいんだとすごく学べたことがあって、そうすると課題の出し方で子どもの取り組み方が違ってきます。例えば世界の食べ物を調べなさいと言って、子どもたちは小学校のときからなにかはやらされてきているから、どうせイタリアはスパゲッティでしょみたいな、そういうところで、先生が、インターネットを使っていけれども、まず日常の食事、家庭料理を調べてきなさいと。で見ていると、じゃあ、その中で主食って何なの、とかって聞いていくと、おおっと、あれこれちょっと手強いぞとなってくるとそれくらいからできてくるのですね。子どもたちが想像していることをひっくり返すぐらいの課題を出した時に、生徒たちの反応が高校くらいから違う気がします。中学校くらいだと、何を出されても楽しくて楽しくてということがあるかもしれないですが、高校くらいになると余計に、「このくらいを出すか」と生徒が先生のお手並みをみているような…それを図書館のカウンターでずっと見ていたという。あっ、これはあかん片手間にできない、これはちょっと違うとかってね。自分自身がレポートなどをたくさん書いてきた先生は上手だなと感じます。

(中村) 私が見ている学生の様子から理解するに、やはり日本の教科教育は先生が問いかけたらある程度の正しい答えがあるという。そういうやり取りを演劇みたいに何人かの生徒とやって見せる、そういう授業の計画をたてて滞りなくできることを、教員養成課程でも学んでいるなと思います。そういう授業ではないというイメージが湧かないのかなとは思いますが。

(家城) 98 年に「総合的な学習の時間」の学習指導要領が出たときに、海外のには最後に振り返りがあるのに日本のにはなかったのです。海外は省察が最後にくるのだけれど、日本ではやはり教えられていることは正しいのだという形で振り返ることがないのだと、「総合的な学習の時間」でも日本の教育はこうなのだと思います。

(フロア 7) ちょっと興味深いのでね。先生はいつも問いの外にいて、答えるのは君たちとなっていて、そういう問いの出し方というのは、教える側だからやるのだろーうけれども、非常に非現実的です。例えば、数学の先生は数学を教えるのだけれど、数学している姿を見せてくれ

ない、実際、数学というのはどうやるのかを子どもたちはずっとわからないわけです。調べる場合も同じで、先生が調べなさいと言うが先生は調べている姿を見せてくれない、調べるとはどういうことなのかがいつまでもわからないのです。そうではなくこうするのだと言われるが、それがなぜかもわからない、問いというもののの中に先生が入っていくかいかないかというのがあると思っています。もう一つ、O.F. ボルノーが「内省の問い」ということを言っていますが、インターネットや図書館にある情報はすべてではなく、どうやって生きていったらよいかという問いは図書館で調べても出てこず、調べたものを基にして作っていかなければならないのだが、そういう問いがないのです。先生はいつも問いの外にいて、「君たちはまだ未熟者だから答えなさい」という態度でいるので、問うということを教えられないのではないのかという気がします。自分が問いとどう格闘をしているかをやっぱり見せるべきなのではないのか、それがないとおそらくすごく借り物の調べ学習になってしまいます。その姿を見せるのが問うことを教えることと言っている人がいます。私はいつも問いに見舞われて、悩んでいるのですがね、悩んでいる姿を学生に見せることが仕事だと思っているので、あまり答えは言わない、言えないというか、ぐちゃぐちゃになっていくのです。それでいいのじゃないかと。きれいな授業をしようと思うと、自分に答えがわかっているものだけ扱ってしまう気がします。

(中村) きれいなものの話でちょっと足しておきたいです。[足立] 先生はプロセスモデルを教えているけど、循環するとか試行錯誤があるとかいうのも大切だと教えているという理解でいいですか？私もそのつもりだったのですが、なんとなく違って聞こえたような（笑）。

(足立) まず生徒を迷わせる。

(中村) あっ、私を迷わせようとしているの？

(足立) いやいや（笑）、生徒を。困った状況に追い込んで、さあどうする。

(中村) 講習を受けている先生たちに？

(足立) ああ、講習を受けている先生たちはね、自分で探究学習を体験してもらうことで、指導にあたっているいろいろなヒントが見えてきます。現場での実践なども振り返って、困った点に関して話し合ってもらいます。プロセスモデルももちろんそこに絡んできます。

(フロア 5) 今のやり方だと体験しながら話し合う感じですか？

(足立) 本当に期間が短く、深くはできません。いちおう型どおりに、先生だから要領よくやりますが、そういうことが大切なじゃなくて、体験を通して、現場でのいろいろな問題を出し合い、自分たちがやったことを振り返って話し合いをしてもらうのです。

(中村) 私とかなり違う点として、プロセスモデルを直線的に教えない方がいいと[足立] 先生は指摘されていたと思ったのですが。

(足立) 必ず最初に計画を立てるのではなく、はじまるのはどこからになるかわからないということです。興味のあることをいろいろ調べているうちにふっと疑問が生じて、その解決の仕方について見通しを立てて、こういう手順で調べていこうというように、必ずしも問いからはじまり、計画をたてるところからははじまるとは限らないということです。

(中村) プロセスモデルというのはいちおう、認知心理学、認知科学の人たちと、図書館情報学の人たちが一緒に研究して作られてきたものです。例えば Big 6 は小学生向けでとても簡易化されて最初に現れたじゃないですか。いろいろな認知系の研究が出てきていろいろつけ加えられて、その後、研究とは別のアイデア勝負で現場の人が modify（編集）したものが出てきた経緯があると思います。デューイの時から問題解決の思考は段階的に示されていて。

(足立) いや、段階とは言っていない。

(中村) でも、段階的に示した (笑)。

(足立) いや、phase (局面) なのですよ。

(中村) ああ、step じゃなくてね (笑)。でも、いちおうあれがそういうふうを受けとめられて、その先にプロセスモデルが出てきたのだよね。それで、プロセスモデルは本当に認知科学の研究に基づいていて、段階的なプロセスを経ていくことが子どもにとって学習の指針になるという意味なのですよ。だから、人の認知の情報の探索の行動を規定、型にはめるために出てきたものではなく、子どもたちが一定程度、最低限の指針を得るために作られたものでしかないのです。情報行動のモデルではないから。

(足立) それはもちろん同意します。だからむしろ逆に、あのモデルを見て、それに当てはめるような教育になっていないかということ問い直しましょう、ということです。

(中村) 何もない状況で子どもたちが指針を得た方がいいよねという意味で、プロセスモデルはすごく意味があると思います。あとから出てきたストリップリング先生やアルバータのとかは高校生を想定して出てきたと理解しています。Big 6 の、一番はじめ簡易的に出てきて、その後も認知科学のいろんな研究があってという段階の中で変わってきたものが、よくなってきたものなのかどうなのかはすごく疑問です。そうではなくて、ある程度、指針として使う必要は段階はあると理解しているので、ある程度、学生に強要しています。J. デューイの理解が私のはよくなかったかもしれないけれど、彼が、問題解決の理論として言い出した人であり作ってきたわけです。その中で出ている要素というのを、あれがステップではないということがあったとしても、あれはある程度ステップと読めるのでは (笑)。少なくともプロセスモデルを知っている私からすれば、ここからすごくヒントを得て作られたものにしか見えないのですがどうなのでしょうね。ステップをわかっている人が、後からそうじゃないところから入ることもあるよねというのと、まったくわかっていない子どもがそれを、こういう円があってどこからでも入れるよ、というのではかなり違うと感じます。プロセスモデルを教えてきたから、私が揺さぶられている (笑) ?

(足立) そろそろ時間かな (笑)。

(中村) 「評価」という語句について…授業評価・形成的評価という視点ではわかるが、いわゆる成績、評定というような意味での「評価」について図書館(司書教諭)はどう関わるのか?」、これはさっき出たような話だけれど、私はあまり答えをもち合わせていないのだけれど。

(足立) 図書館の活動だけで評定をつける? そうじゃないですよ、教科として評定をつける。

(家城) 全校内の論文のようなものの審査員をやったときに、私が見る観点というのは、適切な資料を使っているかどうかだけの評価にし、内容そのものについては、私はわからないし、教科の先生が評価しました。昔聞いた話で、アメリカで卒論を書いて教授が裁定するときに必ず司書が横にいて、学生と指導教授が質疑応答するときに指導教授をサポートしていたという話を聞いたことがありました。そうなのかと思って、私も、資料が本当にあるのかだけは確かめておきました。

(フロア 4) そういう感じだと思います。この部分はこうだから総合評価したらこうなると。学校の中で取り組むとか教科の中でどう実現するかとなるとそれは変わってくると思います。最初から評価の基準の中に何が何割と入ってくるので、その部分で司書教諭がどれだけ活用できるのかという話になってきます。形成的評価や授業評価は授業自身を振り返ってよくしていくという面ではすごく有効だと思っています。一方で、学校関係者以外の成績、評価は、生徒の評価が最終的にどうなるかというのはものすごく関心がある状態の中で、司書教諭、学校司書の参加はどうなるのかと思います。それに関係なく、形成的評価、授業評価

に特化していいのだとなればそれはそれでいいと思います。

(家城) その学校がどれほど資料を用いるということを重要とっていて、どれだけ評価に入れてくれるかの最初の指針を司書教諭がたててもらわないといけませんよね。

(フロア4) ということは、現状ではほとんど教科には入らないということです。ほとんどの授業で、高校レベルでは、それが無い。総合などの特設科目は、司書教諭が中心で担当するということだと思います。

(中村) わりと家城先生が翻訳に関わっている『インフォメーション・パワー』(2000)の、特に活動基準などはループリックみたいになっていますよね。インフォメーションリテラシーを教える内容のループリックのようなものは出てきていると思うので、そういうのを参考にしているのかなと私は思っていました。

(フロア4) 実際、高校の教科の中でそれをやっているところはたぶんないです。

(中村) 司書教諭側からはこういう観点で見えていますということは…私の授業では、学生たちに、授業案では最初に目標と評価を抱き合わせで提示させます。

(フロア4) 教科の教員自身がディスカッションをちゃんとできる人になりましょうとか、ちゃんと情報を読める人になりましょうとかをもう目標に入れている場合があります。そうするとまた変わってきます。

(中村) 社会科や国語科の学習指導要領にはそういう観点がいっぱい入っているのじゃないですか。

(フロア4) 入っていますが、最終的な評定に言うほどの影響は与えていないと思います。そういう授業形態をした結果、個人の学びが深まっていくと。

(家城) これは、今、私が大学で使っている相互評価の表です。私は発表者として、また司書教諭としての学生たちの二つの側面見ているのですが、かなり細かく分けて評価しています。グループ学習に入る前に事前に渡して、他グループの評価時に使います。これが一斑なのですが、これで見てもらっています。京野菜のはこれでは足りなくて、30項目くらいあるのですが、ちゃんと課題を解釈できているのか、とか言われたことを入れられていますかとかいうようなことが入っています。この下に、課題についてできているか、調べ方、作品…逆に、あなたたちが発表するときどこを評価してほしいというのを事前に一項目入れされたりして。そうしたら、3回以上下向かないとか、読まないとか(笑)、いろいろ書いてくるので、今年はこれを入れましょうとして。

資料 NO.					
発表順番		番	班名	班	採点者: 学部
				学生番号	
氏名					
	検定項目	5	3	1	0
課題について	① 課題の理解度	課題を十分に理解している	課題を理解している	課題から外れた内容が1つある	課題から外れた内容が2つ以上ある
	② プランは提示されているか	わかりやすく、説明している	説明しているが、分かりにくい	説明しているが、分かりにくい	記述なし
	③ 京野菜について、5 W1H に対する説明があるか	6つ記述があり、詳しく、わかりやすい	6つ記述があるが、説明は簡潔で不足している	4つ以上記述があり、わかりやすい	3つ以下の記述しかない
	④ 京野菜についての考察	すべての要素をあげ、わかりやすく説明	1 から 2 つの要素をあげ、説明は簡潔	1つの要素をあげ、説明している	説明なし
	⑤ 見学先が書かれているか	見学先はわかりやすく記述あり	見学先の必要な情報が不足している	見学先のみあり	なし
	⑥ 遊覧経路が書かれているか	いくつか、わかりやすく記述	いくつか記述されている	一つだけ記述	記述なし
調べ方	⑦ 資料は複数・多様なメディアを活用しているか	印刷資料・非印刷資料を5つ以上活用	印刷資料・非印刷資料を3つ以上活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを複数活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを1つのみ活用
	⑧ 京野菜と一日プランについて、班の全員で取り組む、ポスターを作成しているか	全員で課題に取り組む、ポスターも全員で作ったとある	班の半数以上のメンバーが取り組み、ポスターも一部のメンバーで作成していた	班の半数以下のメンバーしか取り組みやポスター作成をしていなかった	班の一人にすべて責任を負わせていた

(中村) これは総合的な感じかな。教科教諭がもっている目標はあると思うので、それと司書教諭のものをどうやって分けて考えていくかがこの質問だったのかなと。プロセスモデルや inquiry に関するいろいろな翻訳がでている状況で、評価するところまで書いてあってかなり詳しいのはアメリカの AASL (American Association of

資料 No. _____

発表順番 _____ 番	班名 _____ 班	採点者：学部 _____	学生番号 _____		
氏名 _____					
	5	3	1	0	
課題について	① 課題の理解度	課題を十分に理解している	課題を理解している	課題から外れた内容が1つある	課題から外れた内容が2つ以上ある
	② プランは提示されているか	わかりやすく、説明している		説明しているが、分かりにくい	記述なし
	③ 京野案について、5 W1H に対する説明があるか	6 つ記述があり、詳しく、わかりやすい	6 つ記述があるが、説明は簡潔で不足している	4 つ以上記述があり、わかりやすい	3 つ以下の記述しかない
	④ 京野案についての考察	すべての要素をあげ、わかりやすく説明	1 から 2 つの要素をあげ、説明は簡潔	1 つのみ要素をあげ、説明している	説明なし
	⑤ 見学先が書かれているか	見学先はわかりやすく記述あり	見学先の必要な情報が不足している	見学先のみあり	なし
	⑥ 避難経路が書かれているか	いくつか、わかりやすく記述	いくつかが記述されている	一つだけ記述	記述なし
調べ方	⑦ 資料は複数・多様なメディアを活用しているか	印刷資料・非印刷資料を 5 つ以上活用	印刷資料・非印刷資料を 3 つ以上活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを複数活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを 1 つのみ活用
	⑧ 京野案と一日プランについて、班の全員で取り組み、ポスターを作成していたか	全員で課題に取り組み、ポスターも全員で作ったとがある	班の半数以上のメンバーが取り組み、ポスターも一部のみに作成していた	班の半数以下のメンバーしか取り組みやポスター作成をしていなかった	班の一人にすべて責任を負わせていた

1

School Librarians) の出しているのではいかと思っていたのだけれど。

(家城) 外国のでは結構、細かく出ていますよね。

(フロア 4) ルーブリックはやっているのですが、複数回やってみないと安定しないと思います。一人でやってしまうとちょっとね。ルーブリックがどのくらい説得力があるのかも、議論はしているのですがね。

(中村) ルーブリックはまた議論できるのですけれどもねえ。すみません、私の仕切りがまたよろしくなくて。まあ、これが望んでいたものだったかもしれませんが (笑)、またぐちゃぐちゃになりました。

(フロア 4) すみません、ぐちゃぐちゃにしました。

(中村) いえー。ウェルカムです。では、山本さんの罰ゲームです (笑)。

資料 No. _____

発表順番 _____ 番	班名 _____ 班	採点者：学部 _____	学生番号 _____		
氏名 _____					
	5	3	1	0	
課題について	① 課題の理解度	課題を十分に理解している	課題を理解している	課題から外れた内容が1つ以上ある	課題から外れた内容が2つ以上ある
	② プランは提示されているか	わかりやすく、説明している		説明しているが、分かりにくい	記述なし
	③ 京野案について、5 W1H に対する説明があるか	6 つ記述があり、詳しく、わかりやすい	6 つ記述があるが、説明は簡潔で不足している	4 つ以上記述があり、わかりやすい	3 つ以下の記述しかない
	④ 京野案についての考察	すべての要素をあげ、わかりやすく説明	1 から 2 つの要素をあげ、説明は簡潔	1 つのみ要素をあげ、説明している	説明なし
	⑤ 見学先が書かれているか	見学先はわかりやすく記述あり	見学先の必要な情報が不足している	見学先のみあり	なし
	⑥ 避難経路が書かれているか	いくつか、わかりやすく記述	いくつかが記述されている	一つだけ記述	記述なし
調べ方	⑦ 資料は複数・多様なメディアを活用しているか	印刷資料・非印刷資料を 5 つ以上活用	印刷資料・非印刷資料を 3 つ以上活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを複数活用	印刷資料か非印刷資料のどちらかを 1 つのみ活用
	⑧ 京野案と一日プランについて、班の全員で取り組み、ポスターを作成していたか	全員で課題に取り組み、ポスターも全員で作ったとがある	班の半数以上のメンバーが取り組み、ポスターも一部のみに作成していた	班の半数以下のメンバーしか取り組みやポスター作成をしていなかった	班の一人にすべて責任を負わせていた

1

山本敬子「全 5 回に出席して」

全 5 回出ていたら、なぜか罰ゲームを仰せつかったという (笑)。では、たいそうなことはお話できないのですが、私の感想などをお話して、皆さまが全体を考える材料になればと思います。私がどういう立場でお話するかというと、司書資格を先に取り、その後、甲南中・高で足立 [正治] 先生、中津井 [浩子] 先生と一緒に働きました。その時は学校司書という立場で、授業時間が 700 時間を超える学校でしたので授業支援は学校司書が中心にまかなっている環境でした。授業支援をするうちに教育のことを何もわかっていないことに気づき、働きながら教職課程と司書教諭課程を履修しました。

昨年度からは小林聖心女子学院で司書教諭として働いています。図書館専任で、同じく図書館専任の学校司書とともに図書館を担当しています。司書教諭というと担任をしたり授業をしたりするのが一般的ですが、基本的には私は自分一人の授業はもっていません。ただし、中 1 と高 1 の総合学習の授業は担任と私の TT の形で進めています。1 学年 3 クラスしかないので、中 1 は週 3 時間、高 1 は後期のみ週 6 時間の授業をもっています。高 1 は論文作成の授業でテーマ指導から口頭試問まで、担任の先生と一緒にを行っています。今まで勤めたどちらの図書館も司書教諭と司書がいて、体系的な情報リテラシー育成の授業があるとい

う環境でした。司書、司書教諭の立場から見えたものがたくさんありますが、今回のシンポジウムに限ったお話をさせていただきたいと思います。

全5回参加して、受講者の層の違いによって講義がさまざまにもっともなことを考えさせられました。これは学校でも同じだなとも感じました。目の前の学生・生徒に何を目的に何をどのように教えるかということは大学も学校も究極的には同じであろうと。学習者と教育者が教材を仲立ちにして関係しているということです。そこで教育者がすごく苦心するというのは一緒ですが、大学の場合は教員間の連携がしにくい環境にあるとは感じました。学校であれば教員間で情報交換するのが当たり前ですが、大学は人数が多いし非常勤講師がいてそもそも接点がないという話も聞きました。同じ大学の中でこんな授業をやっている、という情報共有すらままならない状況にあるというのが問題の背景にあるのかなと思います。また、学校図書館を専門とする研究者そのものが絶対的に少ないという印象を受けました。私自身が10年以上前に受けた司書教諭課程は、残念ながら学校図書館の現場のことをわかっている方が少なかったです。もちろんそうでない授業も受けましたが、司書課程の焼き直しというものが多かったです。今回このシンポジウムを聞いて、講義が実践的なものに及んできてそういう先生ばかりでなくなってきた、それは時間の流れでもあるし、司書教諭課程に現職の経験者がかなり多く入ってきたとか、現場からの発信が増えてきたからとか、研究者と現場の交流が増えてきたとかいろいろな要因が考えられます。時代とともに司書教諭課程のレベルが上がってきていると言えますが、それでもやはり専門の人が少ないことは否めないと思います。それは研究者の問題だけでなく、学校図書館そのものが本当にカオスにあるということです。専門職として未成熟で、世間に語れるだけのものをまだ私たちが全国規模で展開できていない、まだまだ発展途上だなと感じます。このシンポジウムはこのような状況をよくするためのよい機会になったのではないかと思います。

各回の所感です。一回目の「学校経営と学校図書館」です。司書教諭養成科目の中で担当者によって一番大きな差があったのはこの科目だったのではないかなと思います。入門的に捉えている方と最終的な仕上げ、総括として捉えている方の二つの立場がありました。私は総括であってほしいと思います。「学校経営と学校図書館」ですから、学校図書館だけでなく学校全体の経営に参画するものだと思っています。そのためには学校図書館とは何なのか、学校図書館の役割を理解していないとできません。経営の中には予算、人員体制をどうするか、組織作りをどうするかということが関わってきますが、学校図書館のイメージがないと難しいのではないかと思います。現場が経営感覚をもって運営できているかということ、必ずしもそうではないという現場の問題もあります。現場も弱いし養成課程も弱いというのがこの科目ではないかと感じました。多様性と学校図書館について講義で取り入れるという話もありましたが、これは非常に重要なことで、もちろんすべての授業に関わってくると思うのですが、特に「学校図書館メディアの構成」、「読書と豊かな人間性」に絡んでくるので、図書館が多様性を保障する場であるということは何回繰り返してもいいのではないかと思います。学校経営を考える時に、予算や効率面で一番忘れがちなのが多様性への配慮だと思います。学校経営に学校図書館を位置づける際、多くの先生が主張することを強化するように動くことがとても理解を得られやすいし話がしやすいです。学校図書館の役割を意識して戦略的に行うのはいいのですが、そうでないと、図書館ならではの機能とか学校図書館でしかできないことが薄れていくような気がするので、図書館と多様性について研究することはとても大切だと感じました。

二回目の「学校図書館メディアの構成」です。この回は現場を経験されている方が多かったのですが、「情報メディアの活用」とリンクするので内容の精選が必要になるかと思いま

した。NDC の理解、どう付与するかというスキルに目を奪われがちですが、そもそも何のために分類するのかということは図書館の基本機能に関わってきます。何も知らない方が図書館担当になってありがちなのが、学校図書館の蔵書を教科別に組み替えてしまうことです。教科主義の中ではやりやすいのですが、図書館というのは教科や学年に捉われず総合的であるのが魅力なのに、あえて教科の枠に戻してしまうという問題点があります。自分の学校図書館だけ使えればいいのではなく、生徒を育てる意味でもある程度の汎用性のある分類、資料構成である必要があります。自立した学習者を育てるためのコレクション形成、環境整備が必要です。

三回目の「読書と豊かな人間性」では読書の意義、子どもの読書の現状、学校図書館と読書について話されていました。読書プログラムの扱い方の違いが顕著で、特定の読書プログラムを自分たちでやってみることに主眼を置くパターン、読書プログラムは紹介だけに留めるパターン、読書プログラムはあまり紹介せずになぜ読書が必要なのかを教えるパターンがありました。読書プログラムを組むときには誰が対象なのかはとても重要で、それをイメージするには現場で数をこなさないとわからない部分があります。それよりもなぜ数多くの読書プログラムの中からそのプログラムを選択するのか、なぜその本をその子どもたちのために選択するのかを考えるための素地を作ることが必要ではないかと感じました。選書眼を養うこと、自分自身の偏向を知ることができたらいいのかなと思います。でないと多様性を保障するコレクション形成ができないし、生徒の選書を反射的に否定して読書意欲を削ぎかねないことにもなります。現場の人間としてはそこが講義内容に入ってくるといいなと思いました。

四回目の「情報メディアの活用」です。何のために誰が何を活用することを想定しているのかが私にはよくわかっていません。生徒が使えるようになるのか、先生なのか、司書教諭なのか、すべてを視野にいれるのか？現場に入ると教科「情報」と関連していくと思いますが、特にここがコンピュータのスキル重視に陥りがちな科目ではないかなと感じました。情報リテラシーを育成するのはいいのですが、情報収集までというパターンが多い気がします。考える力がつくことが大事なので、発信される情報をどう読み解くかというメディア情報リテラシーの領域にもふれないと、情報を正しくキャッチし、読みといて活用していく力はないのではないかと思います。現場でもこれからの課題だと思います。

五回目、今回の「学習指導と学校図書館」です。一番、教職課程との関連性が強く、一教員という立場で現場の実践にすぐ活かせる場所なので、なんらかの形でリンクするといいなと感じました。

各回の簡単な感想です。全体を通してもう一度振り返ると、すべての科目においてどんな生徒、学生、司書教諭を育てるのか、いろんなレベルで自立した学習者を育成するという観点は欠かせないという気がします。各科目の関連性に留意するというのは、司書教諭科目でも現場の学校でも同じことかなと思います。総合することに、学校図書館や図書館の意義があると思います。また、司書教諭が現場でいかに教えるかが意識されている授業の報告が今回は多かったのも、このような授業がもっと増えるといいと感じました。現場はカオスなので、司書教諭がいて学校司書がいて働き方はいろいろ、学校図書館についての理解も先生レベルでも違うし、学校図書館担当者間でもさまざまです。その中でとてもやりにくいし空回りもします。指針となる学校図書館独自の理論を養成課程で得ていると進みやすいなと思います。それから学生への学力の嘆きもよく聞くので、高校までの積み上げをして大学にあげていくのも学校の責任なのかとお話を聞いていて思いました。高大接続と言いますか、情報リテラシー育成について小中高大学を通して考える仕組みができていくといいなと感じまし

た。私からは以上です。

質疑応答

(中村) ありがとうございます。では数分でも、質問等ありましたら、フロアからお願いいたします。どうでしょう。では、私からちょっといっこ。これって言いづらいことなのかもしれないですが、司書課程の焼き直しという印象があったというのは(笑)、そういうふうに見えているということが、現場の人たちにはあるのですか？

(山本) 私も限られたことでしかものが言えないのですが、学校図書館現場にいて、これ学校[図書館]ではなく公共[図書館]の話だよなと思ったのがいくつかありました。

(中村) ん？論点がずれているということ？

(山本) いや、論点というのではなくて、担当する先生自身が現場を知らないままに教えているのだなということを感じたのです。

(中村) 他にいかがでしょう？私、もう一つあるのですが、「学校経営と学校図書館」を総論と言っている意味は、まとめの授業という話ですよね？

(山本) まとめのめつというか、学校図書館のことがわかってないところは考えにくい、やりにくいということです。「学校経営と学校図書館」が学校図書館を学校教育とどう結びつけるかということだとすると、学校図書館と学校組織全体のことがわかっていないとやりにくいであろうと。違う考え方もあるだろうと思うのですけれど。

(中村) タイトルからするとそれに合意するのですが、一方でこの5科目の中で入門的な位置づけにもって来られる科目が他に見当たらないと思う人が多いのかなと思っていました。この辺から受けるような構造にして、私は「学習指導と学校図書館」がまとめの授業だと言っていて、いちおう最後に受けてくださいとしているのですけれど。

(山本) うーん。教えていないから言いにくいですが、教職課程を履修していると「学習指導と学校図書館」から先に入ると入りやすいのかなと思います。「学習指導と学校図書館」をまとめにするのだったら、経営的なこともここで再度入れるとかの形が取れるのかなと。まあ思いつきですけど。大学の中で順番とかコントロールできないことの方がきつ多いと思います。

(フロア9) できない。1コマずつしかないもの。どの学部学科からも[司書教諭資格の科目が]取れて、でもそれぞれの学部学科が自分の専門科目を優先させてほしいというような学内状況の中で、いちおう学生にはこの順番でねと言っても、その順番どおりに取れない学生に取るなとは言えません。

(中村) 私も結局はモデルカリキュラムでしかありません。そうじゃない順番で取るときは覚悟してきてくださいという(笑)。となると、先生方の大学では、入門、まとめという位置づけを授業でしないで、それぞれの科目で教えるべきと信じるものを教えている感じですか？

(フロア10) きつい言い方をすると、司書教諭は最近、カリキュラム崩壊状態で、2年生が「学習指導と学校図書館」をとっていて指導案も知らない指導要領も買っただけという話を聞いています。ガイダンスでモデルカリキュラムは示してはいますが、なるべくとしか言えない。それで必修が取れなくて留年するわけにいかないのが、当然、学部学科が優先になるという悩ましい状況ではあります。

(フロア1) 今、4科目をやっていて、前期の3科目「学校経営[と学校図書館]」、「読書と豊かな人間性」、「[学校図書館]メディアの構成」をちゃんと取らないと、次の「[情報]メディアの活用」と「学習指導と学校図書館」が取れないようになっています。やはり4年生で、小学校も中学校も教育実習などを経験していると、「学習指導と学校図書館」の入り

方が違い、中には[教員採用試験に]受かっている子もたくさんいて、質問とか、他の学生にもいい感じに影響を与えています。私は「学校経営と学校図書館」は入門的な位置づけで、そこに関わるいろいろなものが見えてきたうえで、読書とメディアの形成・活用をして「学習指導と学校図書館」で完成するというイメージで考えています。

(中村) 足立先生のレジュメの中の樹村房の[教科書]中だと、「読書[と豊かな人間性]」と「情報メディアの活用」が最後にくるのですね？

(足立) うーん、それが妥当だと思うのだけれどね。順番を気にするとすれば、「学校経営と学校図書館」から入るべきだと思うのですが、学生に教えているとね、学校の事情を知らないのですよ。生徒の立場でしか知らなくて、教員の事情を知らないのですよ。学校がどういう組織で動いているかから言い出すとキリがなくなります(笑)。

(フロア8) そもそも論で、山本さんが5回を聞いて、この5科目10単位で理想となる司書教諭ができるのかを聞いてみたいです。で、どの大学でも受講生が減っているというような状況の中で、そもそもこの10単位で大丈夫なのっていう。

(山本) ああ…。たぶん、これでスペシャリストが育成されるだなんて、多くの人は思っていないと思います。でも、ちょっとでもというところだと思うのですよね。こういうことを少しでも知っている学生が増えて教育現場に入るというのは大きな意味があると思うので、この表現を別の言い方にすると、今の司書教諭課程ぐらいは現職の教員は知っておくべきということとセットになると思うのですけれど。これはずっと前から言われてきたことですけど。だから、スペシャリストの育成としては、学校図書館の専門職として司書課程だけでも司書教諭課程だけでも不十分だと、私だけでなく、多くの方が思われていることだと思います。

(フロア8) 全部の教員がメディアとか全部のことができていけば、もっと学校全体がスムーズにいくのになと思います。教員免許の更新に図書館のことを入れられないかと、そういう政策的な動きをね、ぜひ大学の側には…

(フロア1) 教員のリカレントで…

(中村) いやいや、今度、[2016年11月29日に文科省が大学長宛に通知した]学校司書のモデルカリキュラムにもいろいろこれが組み入れられてしまって、非常に複雑な状況になっていて、教員免許状前提に[司書教諭資格の]授業をやってきたのに、今後は教員免許状を取らない人もそこにやってくるということになっちゃって、そこに教員免許状の更新の人も来るとなっちゃったら、いったい誰を対象に授業をやるのか、何を養成しているのかわからなくなるのがもう目に見えています。[大学の]教員の側は非常に悩み深い状況にあります。と、そろそろ終わらないといけない。それでは、今日は本当にありがとうございました。

1) 中村 足立正治, 中村百合子「連続公開シンポジウム「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」(第1回):「学校経営と学校図書館」記録」『St. Paul's Librarian』No.31, 2016.3, p.54-85.

立教大学学術リポジトリ <https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/> から閲覧可能。

2) 足立 Focus on inquiry: A teacher's guide to implementing inquiry-based learning. 現在はアルバータ州政府の公開資料としてダウンロードできる。
<https://open.alberta.ca/publications/0778526666>, (参照 2017-07-01).

3) 足立 Stripling Model of Inquiry. アメリカ 議会図書館のサイトからダウンロードできる。
http://www.loc.gov/teachers/tps/quarterly/inquiry_learning/article.html,

(参照 2017-07-01).

- 4) 家城 神奈川県教育委員会「思考力等を問う：高等学校入学者選抜学力検査問題の工夫例」
『中等教育資料』 No.954, 2015.11, p.82-83.
- 5) 家城 同志社『課題解決型学習の第一歩』 同志社, 2014. として研究成果がまとめられた。
「確かな学力 PT」(p.44) にプロジェクトの概要が説明されている。
- 5) 家城 [真田章子]「図書館による思考スキル・言語スキル指導の教材開発（学校図書館から）」
『思考力の鍛え方：学校図書館とつくる新しい「ことば」の授業』 桑田てるみ編著, 学校図書館とことばの教育研究会著, 静岡学術出版, 2010, p.177-191.

シンポジウム当日回収のアンケート結果

(質問別に集計；順不同)

Q1. パネラーへのご質問がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
「評価」という語句について…授業評価・形成的評価という視点ではわかるが、いわゆる成績、評定というような意味での「評価」について図書館(司書教諭)はどう関わるのか？	司書教諭
学習評価については、教職課程でも比較的力を入れてやっていると思いますが、司書教諭クラスでは特にどんなところに重点をおいていますか。	教授
中村さんへ：学生が司書課程も学びたいというところ、どのような知識が不足していると感じるのか具体的に教えてください。	—
中村先生へ 模擬試験で実際に授業を行わせることについて生徒が活動する授業ではなく座学の授業(情報リテラシーを教える?)ということでしょうか？ちょっとイメージが湧かなかったので少し具体的に伺いたいです。	学校司書
(家城先生)インターネット情報(資料)だけでなく、本を使った方が深いものになるというお話でした。私自身も共感していますが、具体的にどう深いものになったり、どうしてそうなるのか(と思われるのか)についてもう少し教えていただけたらうれしいです。今の子ども達は生まれたときからインターネットの環境にいますので、その子ども達に、探究の際の本や体験、本物と出会う大切さも実感してもらうための工夫があれば…	教諭、 司書教諭
足立先生、家城先生へ 集中・講習と学部生中心の授業で目標・内容等と違ってきますか？	—
“探究”をどう教えるか。学校にどう組み込むか。みなさんの経験をうかがえたらありがたいです。	—
5科目の構成、こんなふうに今はとらえているのですが、いかがでしょう？	司書

Q2. パネラーへのご意見がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
・家城さんの、事務職ながら大学非常勤にでるときの困難には、大いに共感をしました。就職時の図書館に常駐してもらうための苦肉の策というのもシタリでした。未来を考えるのに歴史を知ることは大事というのも最近気づきはじめたところでした。	司書
・探究学習、探究プロセスについて…総合的学習などと教科には共通点と相違点があると思うが、どのように考えますか	司書教諭
・教材をNHKの映像や昔の教科からの資料をとっておられたり評価表も詳細でもっとおききたいところでした。	司書教諭

Q3. この連続シンポジウムで議論したいことなどありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
教職課程との連携	教授
2回しか受講していないのですが、司書教諭がアクティブに活動すればするほど図の根幹のインフラをきちんとする司書の必要性を感じます。司書と司書教諭の二職種は本当に必要か否かの議論をおねがいします。	司書教諭

Q4. 本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

回答内容	職名
「学習指導と学校図書館」をどう教えるかということと、現場でどう探究学習をすすめるか、評価はどうするかがこんとんとなるのはやむをえないか。探究学習をすすめるにあたり、図の使い方や情報リテラシーのスキルを身につけていないと問いの解決、いや、問いの発見すらあやういことになるので、そこもセットですね。さいごの、中村さんのだれを対象にしていくな科目になっていくのかというのがこれからの最大の課題ですね。	司書
・各パネラーの講義をそれぞれ受講したい！と思いました。あまりいいと思いますが専任の司書教諭になりたい人にはとても実践的で有益なカリキュラムだと感じました。もちろん、教員になる人の学図の仕事への理解にも…特に、TTでの授業案をそれぞれの視点から考えるという中村先生のお話は参考になりました。研修（学内の新任研など）に取り入れられないか考えてみたいです。	司書
私は司書教諭ですが、こんなにしっかりしたカリキュラムの授業をうけてこなかったなーと思います。（日々勉強です）	司書教諭
授業については情報交換の場が少ないので参加できてよかったです。	教授
養成についてほとんど関心がなかったのでとても勉強になりました。	司書教諭
大変勉強させていただきました。まずは小学校で教えている私達が本をあけると楽しい！！わかった！という経験をたくさんさせてあげないといけないと改めて思いました。（知識として教えるだけでなく）ありがとうございました。	教諭、 司書教諭

後日のパネラーの振り返り

中村百合子

この日は、「学習指導と学校図書館」の話をしながら、学校現場の司書教諭と教科教諭のコラボレーションの実態についての発言がフロアからもたくさんあって、私がアメリカで見たと思って教えてきたことと、ギャップがあるわけではなく、しかもより具体的な話として見えてきて、大変興味深かった（それはフロアの参加者の実践レベルが日本の標準的な学校図書館とは異なっておりかなり高いということではないかとも思った）。改めて、私のような現場経験のない司書教諭資格付与科目の教員が、現場の方たちと交流することの意味、価値を実感した。東京より関西の方がそのような機会が多いと感じるのだが、これは私自身の怠慢でもあるので、今後の課題としたい。

山本さんのまとめから考えさせられたことも多かった。特に、「学校経営と学校図書館」を総論として最後に教えることとし、教職課程から入った学生が「学習指導と学校図書館」を入口にすることができるのではというご意見は目からうろこで、カリキュラム改訂に際しては、やはり学校図書館現場で長年真摯に活動をしている方の意見も反映されるべきだと重ねて痛感した。

足立正治

必要に迫られて、はじめて市立図書館に足を運んだのは、中学生のときだった。もちろん、学校にも図書室があって、それなりの利用指導も行われていたらしいが、ほとんど記憶に残っていない。そんな経験から、勤務校で図書館担当になったとき、子どもたちの自発的な図書館利用を促すことを第一に考えた。利用形態を問わず、まず、学校図書館は、子どもたちの自発的な学びの意欲と力を高める場所として機能していなければならない。拠り所となったのは、アメリカの学校図書館基準（1998&2009）だった。そこには、読み書きばかりでなく、多用なメディアや情報を活用して自らを高めるための幅広い「リテラシー」の概念が具体的に示されていた。そうしたリテラシーを育むことが、民主主義社会の担い手としての生き方や人間性の成熟につながるという、公教育の課題に応える道筋も見えてきた。問題は、日々の教育活動にどのように活かすか。越えなければならない垣根や破らなければならない壁がいくつもあった。

8年間にわたる試行錯誤を経て、2002年から2015年にかけて、大学の司書教諭課程や司書教諭講習などに携わる機会をえて、教職を目指す学生たちや現職の先生たちとともに、学校経営と学習指導の両面から、わが国の学校の現状を踏まえた学校図書館のあり方とリテラシー育成の方法を考えてきた。今回のシンポジウムで必ずしも十分な総括ができたとは思わないが、これからの司書教諭養成を考えるうえで何らかのよすがとなれば幸いである。

家城清美

研究者として「学習指導と学校図書館」を教えておられる先生、教科教員として学校図書館と関わられた先生、学校図書館の中から教科教員の支援をしてきた司書教諭という三者三

様のバックグラウンドをもつ人たちの発表であった。授業の情報交換を公式的にすることがないので、大いに関心をもちこのシンポジウムに臨んだ。質疑応答では日々の活動の中での問題解決の糸口を模索されているような質問が多かったように思う。ただ、校種の違いなどもあるが、探究学習を誰が計画し、進めそして評価するかには困難さが目立ち、司書教諭の役割や活動範囲の理解の共有には至らなかったと思った。しかし、これが学校教育の現状であり、学校図書館の現状であることが浮き彫りにされたとも思った。教育変革ではこのあたりが変えられない限り、いつまでも伝統的な枠の中で誰がどのように実践し、評価するかに固執するのではないかと思われる。今回のシンポジウムは司書教諭に関する科目の教授状況を共有できる貴重なものであった。今後さらに司書教諭に関する授業のあり方について議論されることが必要であり、研究者、学校現場の教科教員や管理職と司書教諭の協議の中で司書教諭に関する共通理解を形成することとそれをどのように授業に組み入れるかが重要と思った。この機会をくださった中村百合子先生に感謝します。

山本敬子

今回のシンポジウムではさまざまな方が自らの講義内容を惜しみなく公開してくださった。養成現場と学校現場、双方の立場の人間が集まって、実践を共有して話し合うという機会は滅多にない。養成課程のあり方についてさまざまな気づきが得られ、学校図書館現場を見つめ直すこともできて、大変刺激的な時間となった。さまざまな方の力があわさって実現した今回のシンポジウムが、学校図書館を前進させるための一つの材料になればと願う。